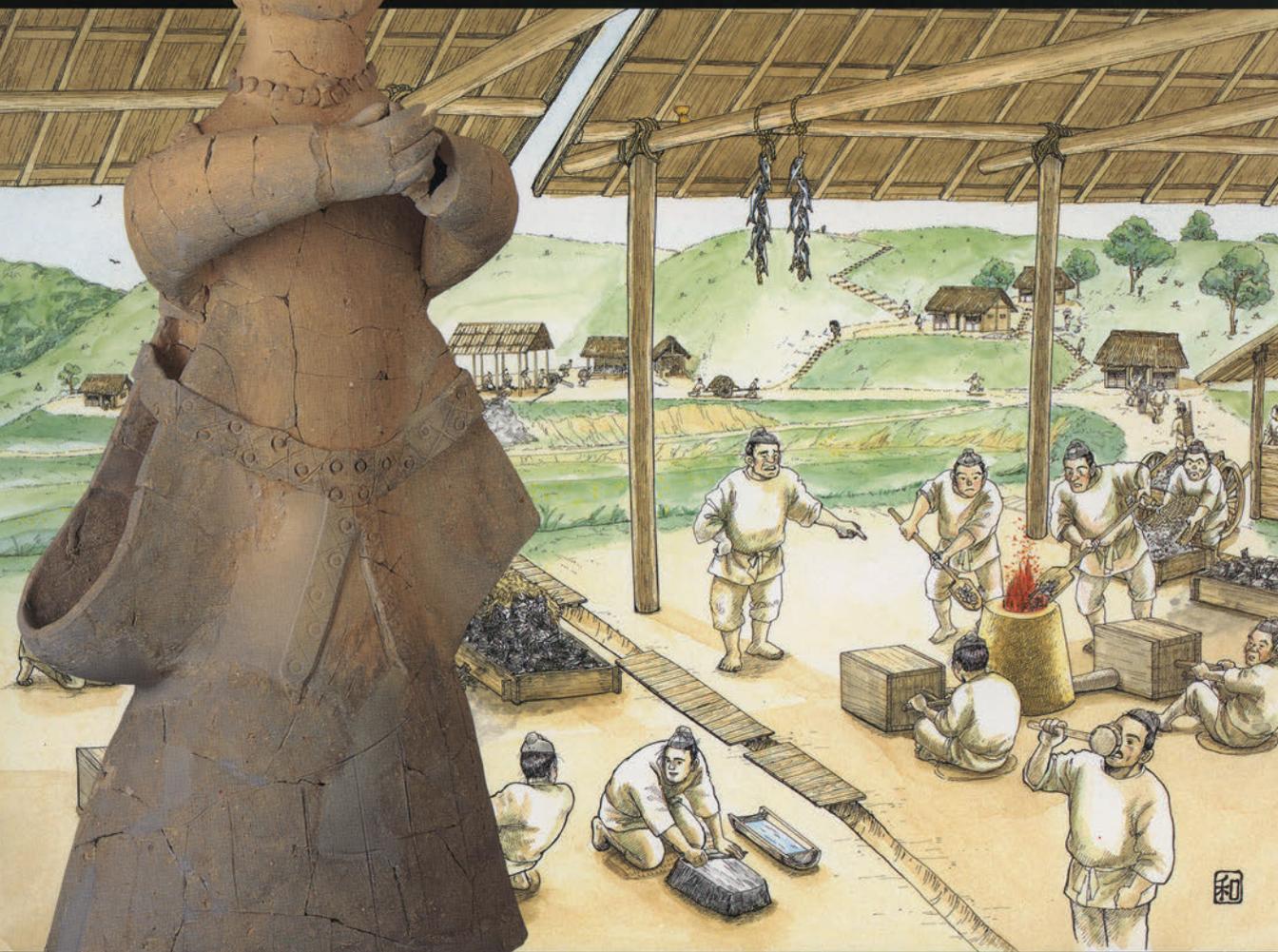


京都府埋蔵文化財調査研究センター 10周年記念 特別展

# 京都 古代との出会い



1990年

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## ごあいさつ

1981年4月から業務運営を始めました京都府埋蔵文化財調査研究センターは、今年度で設立10周年のふし目の年を迎えるにいたりました。この10年間に、全国では、藤ノ木古墳、長屋王の邸宅（奈良県）、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）など貴重な遺跡が発見されました。京都府においても例外でなく、私市円山古墳、広峯15号墳、平安宮豊樂殿跡、芝ヶ原古墳、恭仁宮朝堂院南門跡、上人ヶ平遺跡などの調査はその代表的なものであります。

こうした発掘調査の成果を多くの方々に知っていただくために、当調査研究センターの設立10周年を記念して、本展覧会を開くことにいたしました。企画・立案にあたっては、京都のひと・王と民・遊び・花など、古代から現代に通じるテーマを選び、まず分かりやすい展示を心がけたつもりであります。展示品は、この10年間に新しく見つかったものを中心に、一部それ以前の出土品も対象といたしました。

本展の開催にあたり、共催団体として御協力いただいた京都府教育委員会・京都文化財団、ならびに御後援くださった各団体、貴重な文化財を御出品いただいた諸機関・個人の方々、御指導・御協力を賜った関係者の皆様に心から厚く御礼申し上げます。

1990年8月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

## 目 次

### ごあいさつ

1. 京都のひと	1
2. 王と民	9
3. 文字	23
4. 都	27
5. つくる	33
6. 戦い	43
7. 遊び	51
8. 音	55
9. 花	59
10. うつわ	65
11. 住まい	71
12. 調査研究10年	79
掲載遺物リスト	92

# 1. 京都のひと

最新の発掘成果をもとに、京都の古代にタイムトリップしてみませんか。

まず手始めに出土品を通して各時代の京都のひとに出会ってみよう。粘土板に目・鼻・口を表現しただけの縄文時代の土の人形（土偶）から江戸時代の京人形まで。さまざまな顔そのものが、京都がたどった歴史を語ってくれる。

1 京都の古代人を代表する美男子像  
田辺町堀切7号墳の人物埴輪 6世紀





2~4 粘土板でできた人の顔（土偶・土面）  
縄文時代

5 人の顔を表した土器（人面土器）  
1・2世紀

## 縄文の京都のひと

最古の京都の顔は、縄文時代の人形（土偶）の中に見いだすことができる。貼りつけた粘土の帯と線・孔で目・鼻・口を表現しただけの素朴なものだが、大自然に命を委ね、豊かな獲物と子孫繁栄を願った、何千年も前の私たちの祖先の面影をしのぶことができる。

## 弥生の京都のひと

粘土の帯を貼りつけた眉、細い写実的な鼻、上下を線で縁どり、切れ長にくりぬいた眼孔。全体に柔和な相貌からみて女性を思わせる。森本遺跡の顔は、五穀豊穡を祈る巫女の表情を、穀物を貯蔵する壺の腹部に再現したものである。

## 古墳の京都のひと

堀切7号墳の人物埴輪が古代の京男を代表するのなら、丹波町の塩谷5号墳の巫女の埴輪は、古代の京女を代表するといえるだろう。髪は烏田髷に結び、くびにネックレスをかけ、ひだのあるスカート（裳）とたもと状の意須比をつけ、櫛掛けた正装で神に祈るその姿は、清楚で美しい。城陽市赤塚古墳の武人埴輪は、戦士の姿を写したものである。5世紀に山城南部一帯を治めた有力豪族を支えた武人の姿がそこにある。





6



7



8



9



- |   |                 |     |    |          |     |
|---|-----------------|-----|----|----------|-----|
| 6 | みこ<br>巫女        | 6世紀 | 8  | 男        | 6世紀 |
| 7 | よろいかぶと<br>をつけた男 | 5世紀 | 9  | 男        | 6世紀 |
|   |                 |     | 10 | みこ<br>巫女 | 6世紀 |



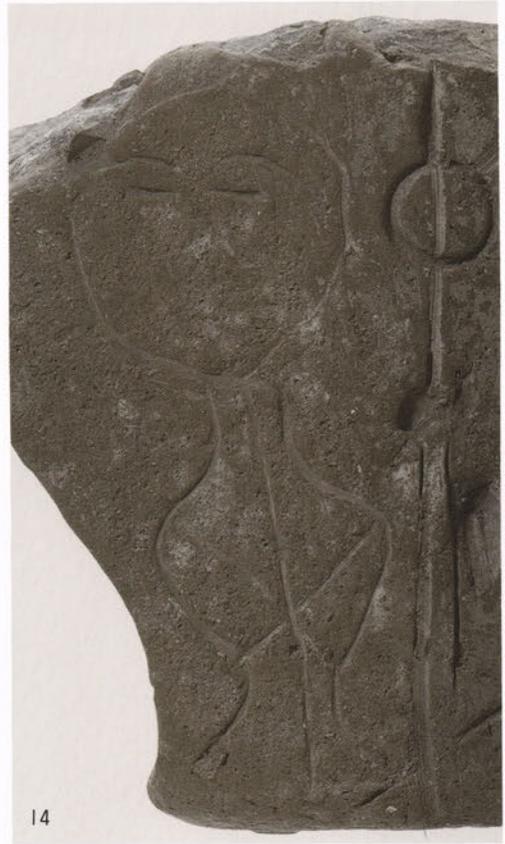
11



12



13



14

## 奈良・平安の京都のひと

古代には、身のけがれや煩いを<sup>わずらい</sup>形代（身代り）に移して水に流して清めるといふ儀式（祓）が都の内外で広く行われた。人形（人の形代）や人面墨描土器、土馬、<sup>いみぐし</sup>齋串などの祭祀遺物は、この祓に使用されたもので、都城遺跡・官衙遺跡の川、溝、井戸などから見いだされることが多い。長岡京跡から出土した人形・人面墨描土器に描かれた顔には口髭、<sup>くちひげ</sup>顎髭をたくわえたものが多く、下級官人を思わせる。奈良の都から長岡京へ転勤し、やがて平安の都へ移る。今も昔も変わらない役人の不安や悲哀を伝えているようだ。

11～13 人の身代り(人形) <sup>ひとがた</sup> 8世紀

14 鬼瓦に描かれた人物 8世紀



15



15 人の顔を描いたまじない用の土器（人面墨描土器）

1コ of 土器に3面の顔を描く。表情は三者三様、喜怒哀楽を表わす。上は、右下の顔のアップ。8世紀

## 江戸の京都のひと

瓜実うりぎねの典型的な京美人の顔である。頭髪は植毛の技法によって日本髪に結び、着物姿の胴体の上にとりつくものと思われる。京人形に女性美の粋を追求する人形職人の、高度に洗練された技をうかがうことができる。

伏見人形の福助は、お多福と並んで京の商家の店先を飾る顔である。福助の名は、京都の大文字屋の使用人の名に由来するといわれる。頭の大きい人のことを大文字屋といっ  
てからかうのも、ここからきている。

16 人形の頭部 17世紀

17 伏見人形の福助 18世紀



16



17

## 2. 王 と 民

本格的な稲作が始まると、人びとの間に貧富の差が生じ始め、支配する人、される人に分かれていく。上に立つ人は、次第に力を強めて、ついに「王」になった。「王」は自らの権威を高め、力を誇示するために数々の宝物をもち、豪華に身を飾り、死ぬと宝物とともに手厚く葬られた。農業にたずさわって「王」の力を支えた民衆は、また、「王」のために宝物を作り、古墳を築き、そして自らは簡単な穴に葬られた。

- 18 大小2対の龍がそれぞれまん中の玉をくわえて向きあっている意匠の刀の柄飾り(環頭大刀)  
久美浜町湯舟坂2号墳 6世紀
- 19 刃先まで木でできた鍬<sup>くわ</sup>  
木津町瓦谷遺跡 4世紀



18



19



▲ 周囲に石を貼った村のリーダーの墓（貼石墓）<sup>はりいしぼ</sup> 舞鶴市志高遺跡 1世紀



## 王の墓・民の墓

村のリーダーが死ぬと、村人は彼のために土を盛り上げて墓を造り、霊を慰めてまつた。やがて、村々の統合に成功した「王」の墓は急激に大型化し、「王」は、数多くの宝物とともに埋葬された。墓は河原石で覆い、埴輪を並べ、聖域として区画した。このように「王」が死ぬと後継者は、「王墓」によってその権威を民衆に見せつけた。その民衆は、村の近くの集団墓地に重なりあうように葬られた。

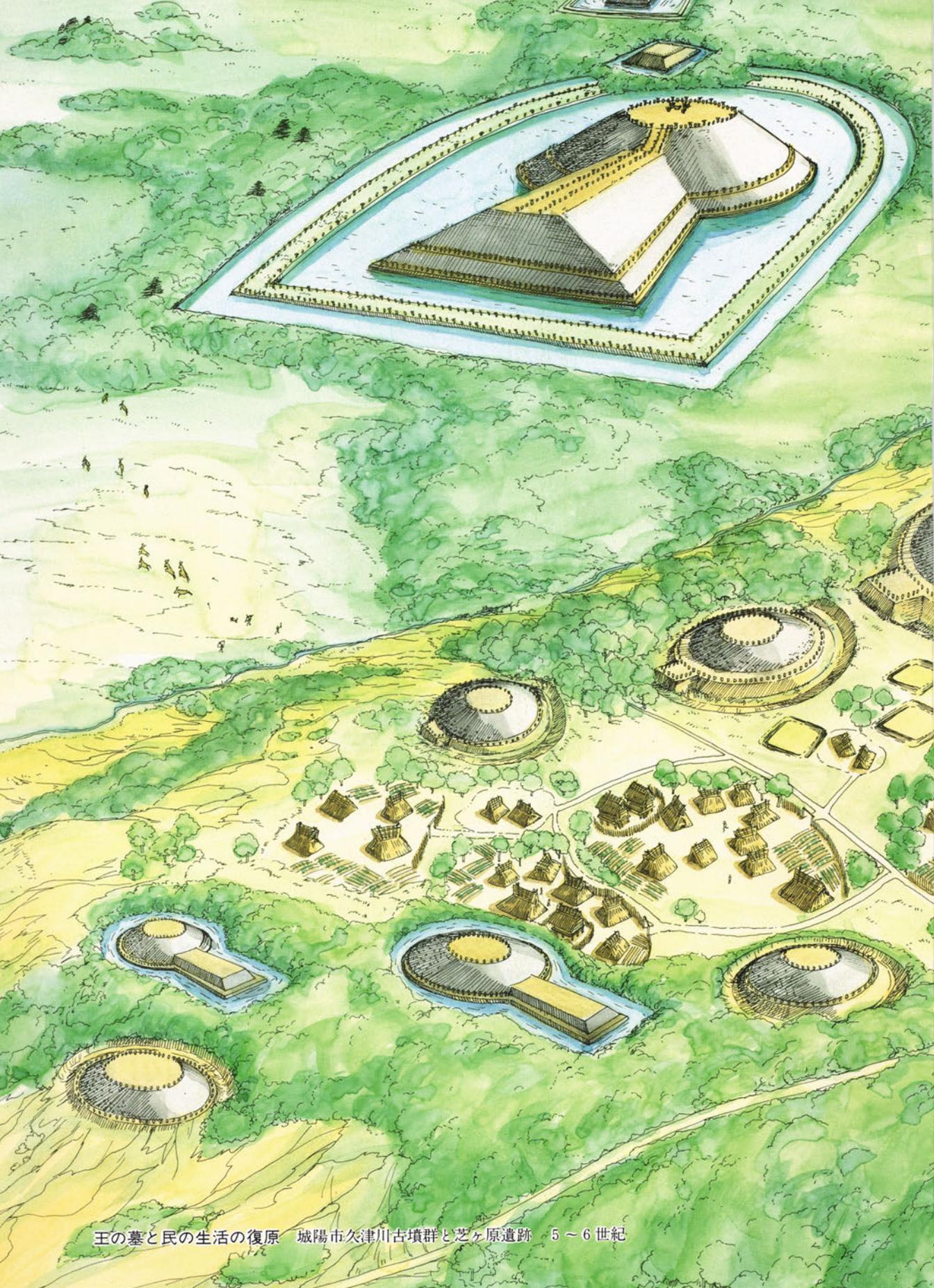
- ◀ 丘の上に造った有力な家族の墓（台状墓）<sup>だいじょうぼ</sup>  
大人は大きい木棺に、子どもは小さな木棺に、赤ん坊はさらに小さな土器の棺に葬った。  
丹後町大山墳墓群 3世紀



▲ 丘の頂きに造った「王」の墓 綾部市私市円山古墳 5世紀

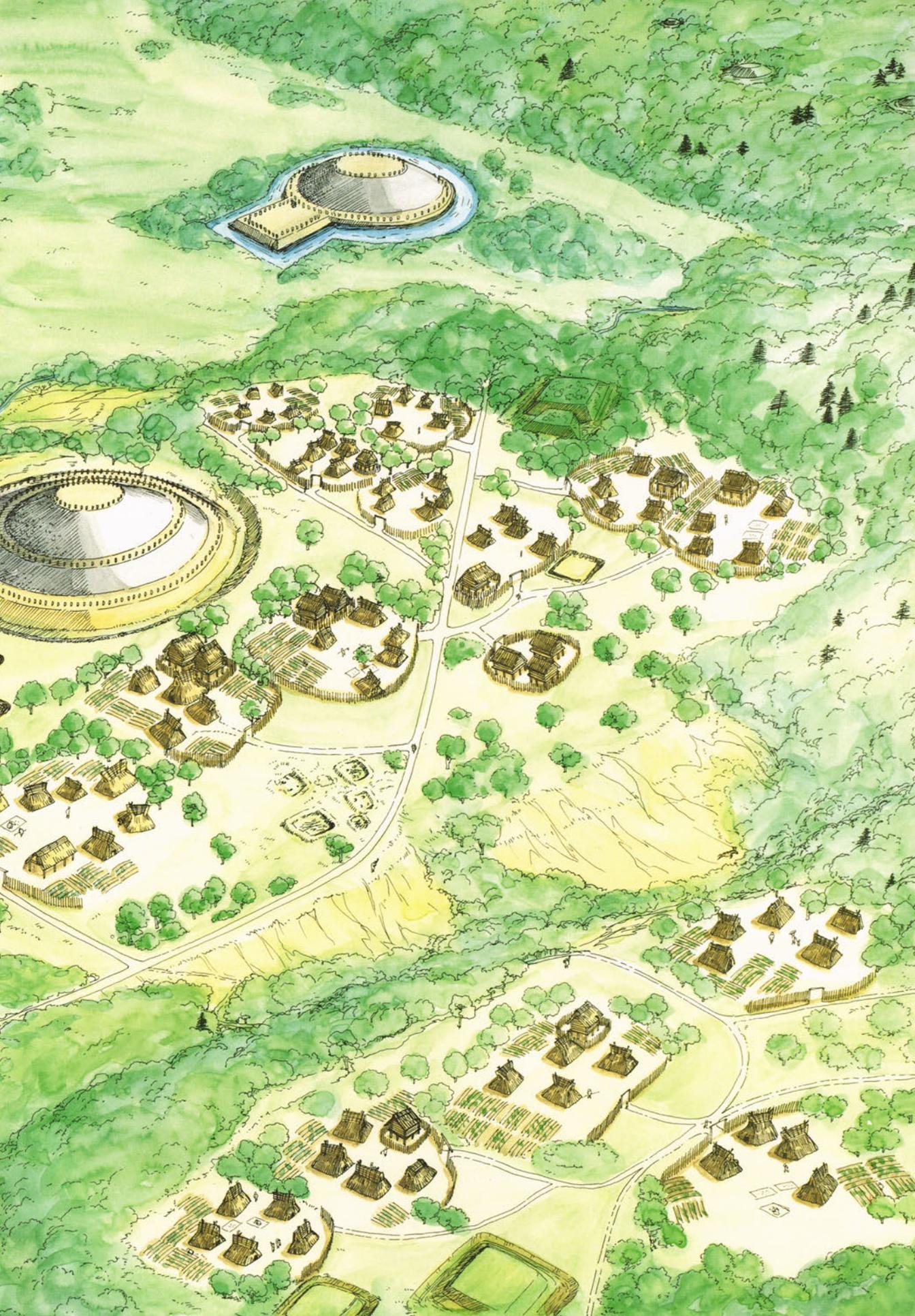
▼ 民衆の集団墓地（土壙墓）<sup>どこうぼ</sup> 直径0.6~3.4mほどの穴が無数にあいている。綾部市三宅遺跡 3~4世紀





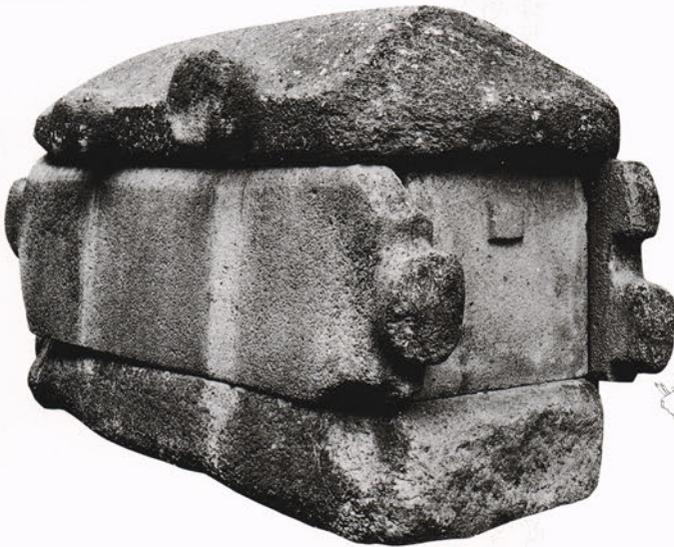
王の墓と民の生活の復原 城陽市欠津川古墳群と芝ヶ原遺跡 5～6世紀







▲ 「王」の石棺とそれを取り囲む埴輪  
加悦町蛭子山1号墳 4世紀



20

20 兵庫県なかもろがたせつかみの石で作った「王」  
の棺(長持形石棺) 5世紀

21 焼きもので作った棺  
(陶棺) 6世紀



14



21



▲ 厚く粘土で密封した「王」の棺（粘土槨）  
八幡市ヒル塚古墳 4世紀

## 王の棺

「王」を葬った棺には、木・石・土で造ったさまざまな形がある。木棺は、埋葬が終わると「王」の魂を封じ込めるかのように幾重にも粘土で覆った。石棺は、はるか九州産の石で作ったものもあり、棺の存在自体が「王」の力の偉大さを物語っている。石棺は朱で赤く塗り、人の穢れを拒絶するかのよう<sup>けが</sup>に厳粛に石室におさめた。

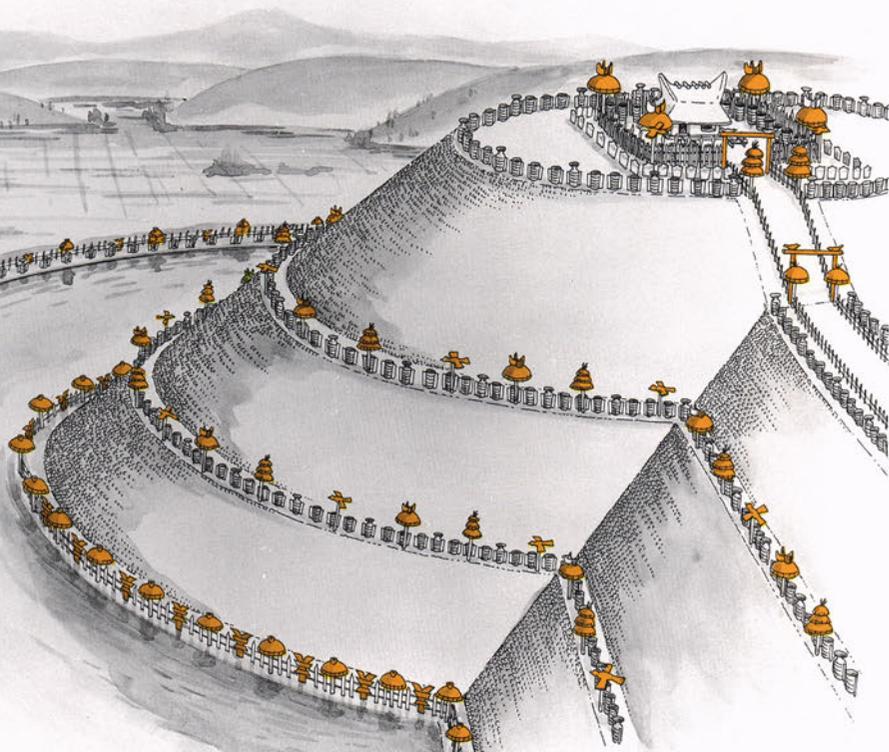
▶ 石室に安置した石の棺（家形石棺）  
向市物集女車塚古墳 6世紀





▲ 古墳を覆った河原石(葺石)と円筒埴輪 円筒埴輪は、器をのせる台から生まれた  
おお ふきいし うつわ  
 加悦町鳴谷東1号墳 5世紀

▼ 聖域を区画する埴輪列 茶色は「木の埴輪」 原案 高橋美久二



## 聖域と埴輪

古墳は、「王」が眠る聖域である。この聖域と人が住む俗域とを区画するために、円筒形の埴輪を幾重にも立て並べた。



22



23



24



25



17

26



27

22 弓を射たとき弦が手に当たるのを防ぐ<sup>つる</sup>の埴輪 5世紀

23 水鳥の埴輪 5世紀

24 革のよろいの埴輪 4世紀

25 身分の高い人にさしかける傘<sup>きぬがさ</sup>の埴輪 5世紀

26 矢を防ぐ<sup>たて</sup>の埴輪 6世紀

27 甲と冑をつけた武人の埴輪 5世紀

## 芝ヶ原古墳の宝物

城陽市にある芝ヶ原古墳からは、葬儀に使った器と鏡・腕輪・1400余個の飾り玉が出土した。これらは、まさに、村の長から「王」へと変貌する過渡期の宝物である。3世紀のことである。

28 4匹の獣をあらわした鏡

29 カサガイで作った腕輪を忠実にまねた銅製の腕輪



28



29



30

30 儀式用の土器

下においた破片から上の復原模型を作った。

31 古い形を残す飾り玉（勾玉・管玉・小玉）



18

31



32



33

## 神聖なる飾り

奄美・沖縄の海でとれるイモガイなどの貝で作った腕輪は、二千年前の九州の人々にとって単なるアクセサリではなく、不思議な力をもつ宝物だった。「王」は、その力をあがめ、緑色や青色の石でそれをまねた腕輪を作った。

32~35 南海産の貝(ゴホウラ・イモガイなど)の腕輪をまねて作った緑色の石(碧玉<sup>へきぎょく</sup>)の腕輪 4世紀



34



35



36



37



38



40



39



41



42



43

20

## 鏡と呪力

古代の日本では、鏡は、人の姿を写すためよりも宝物として扱われた。中国産の鏡の裏面には、神や獣が生き生きと造形され、さまざまな思想がこめられていた。それをまねて作った日本の鏡では、図像の意味が理解されず、大きくくずれた。しかし、鏡自体のもつ意味は薄れず、「王」たちは鏡を神そのものと見立て、その呪力を信じた。

- 36 6匹の獣の顔を並べた日本製の鏡 5世紀
- 37 まん中に四角形を置き、渦巻文を描いた日本製の鏡 4世紀
- 38 3人の仏と3匹の獣を描いた中国製の鏡 4世紀
- 39 4匹の獣のまわりを半円と四角がめぐる日本製の鏡 4世紀
- 40 4人の神と3匹の獣、文字のある中国製の鏡 4世紀
- 41 獣や神を二重にめぐらす日本製の鏡 4世紀
- 42 龍と文字をかいた中国製の鏡 3世紀
- 43 まん中の四角のまわりにたくさんの円を描いた日本製の鏡 4世紀
- 44 ヒモを通すつまみに龍を描いた中国製の鏡 4世紀
- 45 龍と虎が追いかける図像の中国製の鏡 5世紀
- 46 実在しない中国の年号をいれた中国製の鏡 4世紀



44



45



46



47



48



49



50

## 権威の演出

「王」は、金色に輝く刀や指揮棒、青・緑の飾り玉で身を飾って、その権威を誇示した。そのような派手な道具立てのほか、椅子や机など、今からみれば平凡だが、当時の一般の人々にとっては、まだ縁遠い調度品も使い始めている。

47 玉を噛む2匹の竜の意匠のある刀の柄の飾り 9頁のものに比べ形がくずれている。製作者は図像の意味を知らない。

7世紀

48・49 <sup>メッキ</sup>金・銀鍍金した指揮棒頭 指揮棒は権威の象徴 朝鮮半島からの舶来品 5世紀

50 ガラスのネックレス

青・緑・黄と色あざやか。特に、黄・緑をひとつの玉に使ったのは珍しい。5世紀

51 日本最古の机

現代の私たちにとって机は平凡な存在だが、古墳時代には珍しかった。これが唯一の例。「王」が食事に使ったのか、神への祭壇だったのか。板の四方に孔をあけ、足をさしこんでいる。

4世紀



51

# 3. 文 字

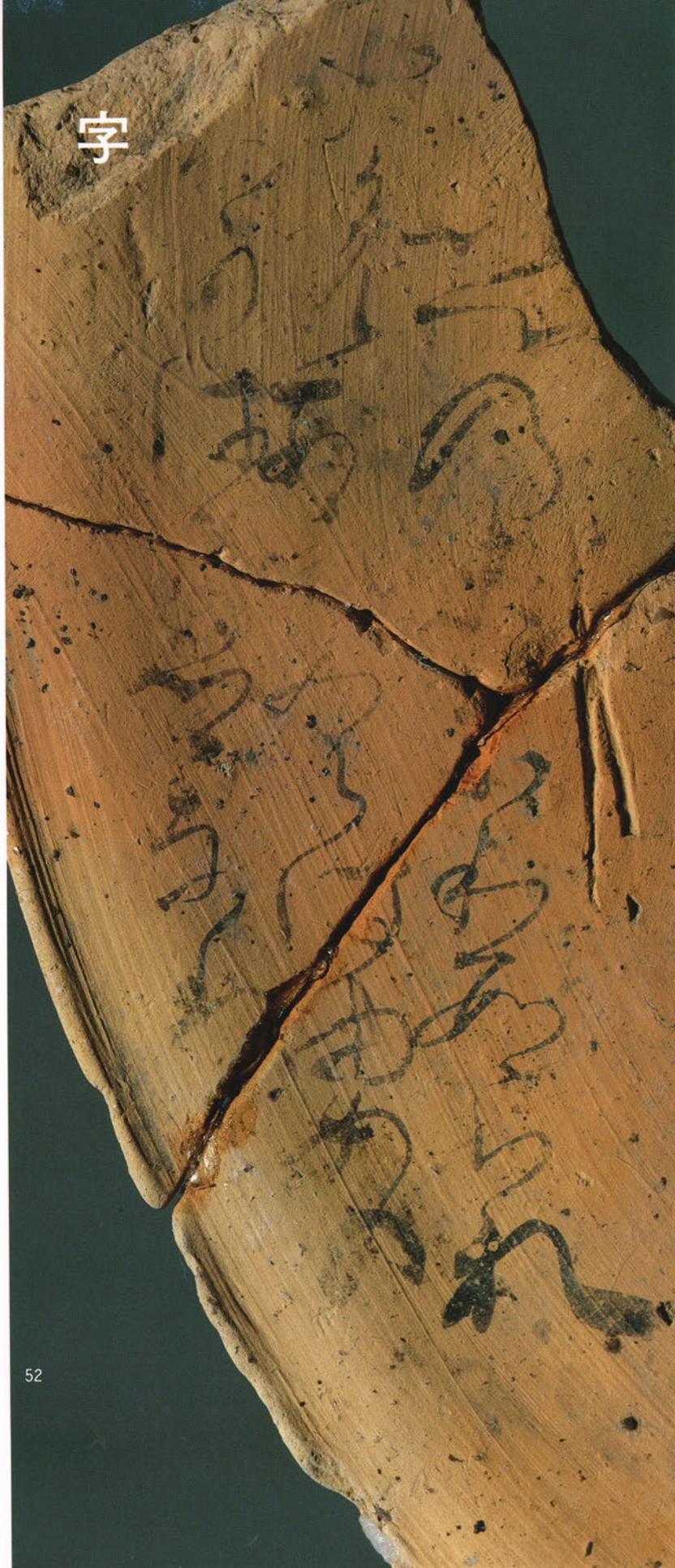
いつのまに わすられ  
にけむ あかみには ゆめの  
…はか はるうつつなり

福山敏男  
解読

中国伝来の漢字から、平安時代には、ひらがな、カタカナがうみだされた。これらを作ったのは、他ならぬ平安貴族、京都女性であった。『枕草子』、『源氏物語』、『徒然草』など古典文学の多くも、京都で書かれたものである。戦国時代には、ヨーロッパの文字も入り、ローマ字を記した木ぎれ（木簡）も出土している。発掘された文字資料の中から京都ならではのものをさぐってみたい。

52 土師器に書いた和歌 平安宮左  
兵衛府跡 10世紀

52



## 発掘された文字

福知山市広峯15号墳出土の景初4年(240)の年号をもつ銅鏡は、古代の日本と中国の交流や三角縁神獸鏡の製作地について論争をひきおこすなど京都府の古代の文字資料としては全国的に注目されている。長岡宮からは墨書きした木ぎれ(木簡)が数多く見つかり、役所や都の内外の人と物の移動の様子がわかる。その他、古代以来、紙以外に文字を書いたものに、土器に墨書きしたもの、瓦に文字を刻んだもの、銭、お経を入れて埋めた銅筒などがある。また、文字を書くために墨をすった硯やそれに水を注ぐ水滴も、役所の跡からしばしば見つかっている。

- 46 景初4年の年号をもつ銅鏡の文字部分の拓本  
直線になおしてある
- 53 まん中で墨をする円面硯  
7世紀
- 54 風という字の外形に似ている風字硯  
9世紀
- 55 硯に注ぐ水入れ(水滴)  
8世紀

。景初四年(二四〇)五月の丙午の日、陳氏がこの鏡を作った。役人がこの鏡を持つと大臣クラスにまで出世する、これよりもすぐれたものはなく、子孫にはめぐまれ、いのちは金や石のように不滅になるであろう 福山敏男 解説

。景初四年五月丙午之日 陳是作鏡 吏人詔之位  
至三公 母人詔之 保子宜孫壽如金石兮



53



54



55



59 秦安麻呂

58 糟參升左右史生等所請十月十七日三嶋、道

57 請中板屋東隔鏝一具在打立者

右依右中弁宣為收納作物所請如件

事了者返上 八年七月十九日上毛野三影麻呂

56 御司召

上加□園依 上加□虫万呂 秦得万呂 右三人等為流人送召件人等宜承知□

加□乙人

60 鮭皆綿

61 □應應應應應

現代語訳の試み

61 應（応の旧字）の字を練習したもの。

60 一説によると、鮭の腸の塩辛。

59 「秦安麻呂」  
はたのやすまろ

58 「もろみ、三升を下さい。内閣官房の書記が必要なのです。十月十七日、三嶋鳴道」  
みしまのなる

57 「まん中の板倉の東壁の扉の鍵一式を貸して下さい。用事がすみ次第返します。延暦八年（七八九）七月十九日、上毛野三影麻呂」  
かみ野のみかげ

56 「上加□園依、上加□虫万呂、秦得万呂、加□乙人右の三人（四人書いてある）、罪人を護送するために出頭しなさい、よろしく承知しなさい。」  
あより、むしまろ、はたのくまろ、おろと



59

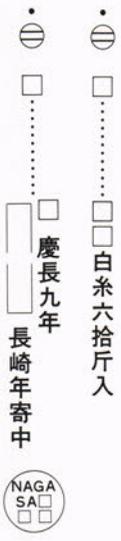
58

57

60

56

61

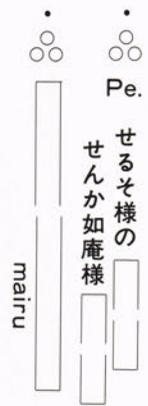


62

## 横文字がやってきた

今から約400年前、スペイン・ポルトガル・オランダの人々がさかんに日本へやってきた。キリスト教の布教と黄金の国「ジパング」の珍しい品物を手に入れるためである。彼らの多くが京都へ来たため、当時の京都には、多くの横文字がはいていた。それらを示すおもしろい資料が出土している。

- 62 ヨーロッパ人との貿易を独占した有力商人の生糸の売買手形(糸割符)  
慶長9年(1604)、有力商人のリーダー(年寄)を示す字や「NAGASA□」(長崎)の刻印がある。



63

- 63 宣教師のセルソのもとにいる仙家如庵という人に届けた品物につけた荷札 日本語とローマ字の両方で書いたらしい。「参る」という当時の手紙の終りに書く表現を、ローマ字で「mairu」と書いてある。

## 4. 都

京都府には、<sup>く にきょう</sup>恭仁京、長岡京、平安京の3つの首都が存在した。「京」、つまり都の中央北部には、天皇の住まい(内裏)<sup>だいり</sup>と役所とからなる「宮」があった。京は、大小の道路で区画され、貴族や庶民が住み、「市」<sup>いち</sup>と呼ばれる公設市場や寺院、神社も建っていた。現在、3つの都の遺跡の発掘調査が進み、建物の跡や地方から納めた税につけた墨書きの木簡<sup>もっかん</sup>など数々の資料が見いだされ、古代の政治経済、社会が明らかとなっている。

64 <sup>うわぐすり</sup>緑の釉薬をかけた平安宮の瓦  
(<sup>りよくゆうのき</sup>緑釉軒丸瓦) 9世紀

▶ 長岡宮の中心部の模型



64



## 恭 仁 京きょう

奈良時代の中ごろの、聖武天皇の恭仁京（天平12～16年、740～744年）は、京都府の南端、奈良県境に近い、相楽郡加茂町れいへい例幣の恭仁小学校付近が中心だった。都が移ったころは、政治情勢が不安定で、3年あまりの短命で終わった。近年の発掘調査によって、宮の中心建物（大極殿だいごくでん）や政治を行う中心部分（朝堂院）の範囲、宮の内部を区画する塀や大小の建物などが確認され、宮の規模や内部の様子が明らかになってきている。京の様子は、まだほとんど解明されていない。この都の中心は、のちやましろのくにに山背国の国分寺に転用された。本堂や七重塔の柱を支える大きな石（礎石そせき）が現在も残っている。



65・66 恭仁宮の宮殿の瓦

▼ 恭仁宮大極殿の礎石



▲ 空から見た恭仁京 まん中を流れるのが木津川

## 長岡京

長岡京は、延暦3年(784)、桓武天皇によって、奈良平城京から移された都である。この都は、京都府の西南部、大阪府境に近い、阪急西向日駅付近を中心に、3市1町にまたがっている。水陸の交通の要地に営まれ、桓武天皇の新しい政治の第一歩であったが、数々の理由で、延暦13年(794)までの10年間で棄てられ、以前は幻の都とさえ言われていた。しかし、宮の中心建物(大極殿)をはじめ、左京、右京あわせて大小800カ所以上の発掘調査によって、かなり完成された都であったことがわかってきた。つまり、宮内の役所や京内の住宅の建物、京内の碁盤目状の道路や、木簡、土器、瓦などの遺物の出土によって、都の規模や形態、人々の暮らした様子がだんだんに明らかとなってきたからである。



67

67 長岡京から出土した、縁が8つになった鏡 4人の仙人が獣に乗った意匠(四仙騎獣八稜鏡)



▲ 空から見た長岡京 まん中を斜めに横切るのが阪急京都線



▶ 長岡宮の土堀の跡

## 平安京

延暦13年（794）、桓武天皇は、長岡京から平安京に都を移した。以後平安京は、明治維新までの千年間、日本の首都として、政治、文化の中心地として栄えた。平安京の人口は10～15万人と見つめられている。この都は、ほぼ現在の京都市中心部と重なり、碁盤目状の道路など、現在の京都の姿にも大きな影響を与えている。千年の歴史の間に、貴族から武士に政治の実権が移り、たびたびの戦乱の舞台となって火災にあったり、新しい町づくりが行われるなど、その形態は大きく変化した。この20年来の発掘調査によって、平安時代初めの宮の中心建物（豊楽殿）や貴族の邸宅、寺院などが見つかかり、京の町割りが復原できるようになっている。



68

- 68 平安宮の宴会場、豊楽殿跡から  
見つかった緑色の鳳凰の文様の  
ある屋根飾り（緑釉鳳凰文鴟尾）

▼平安宮豊楽殿の土台となる石積（壇上積基壇） 9世紀



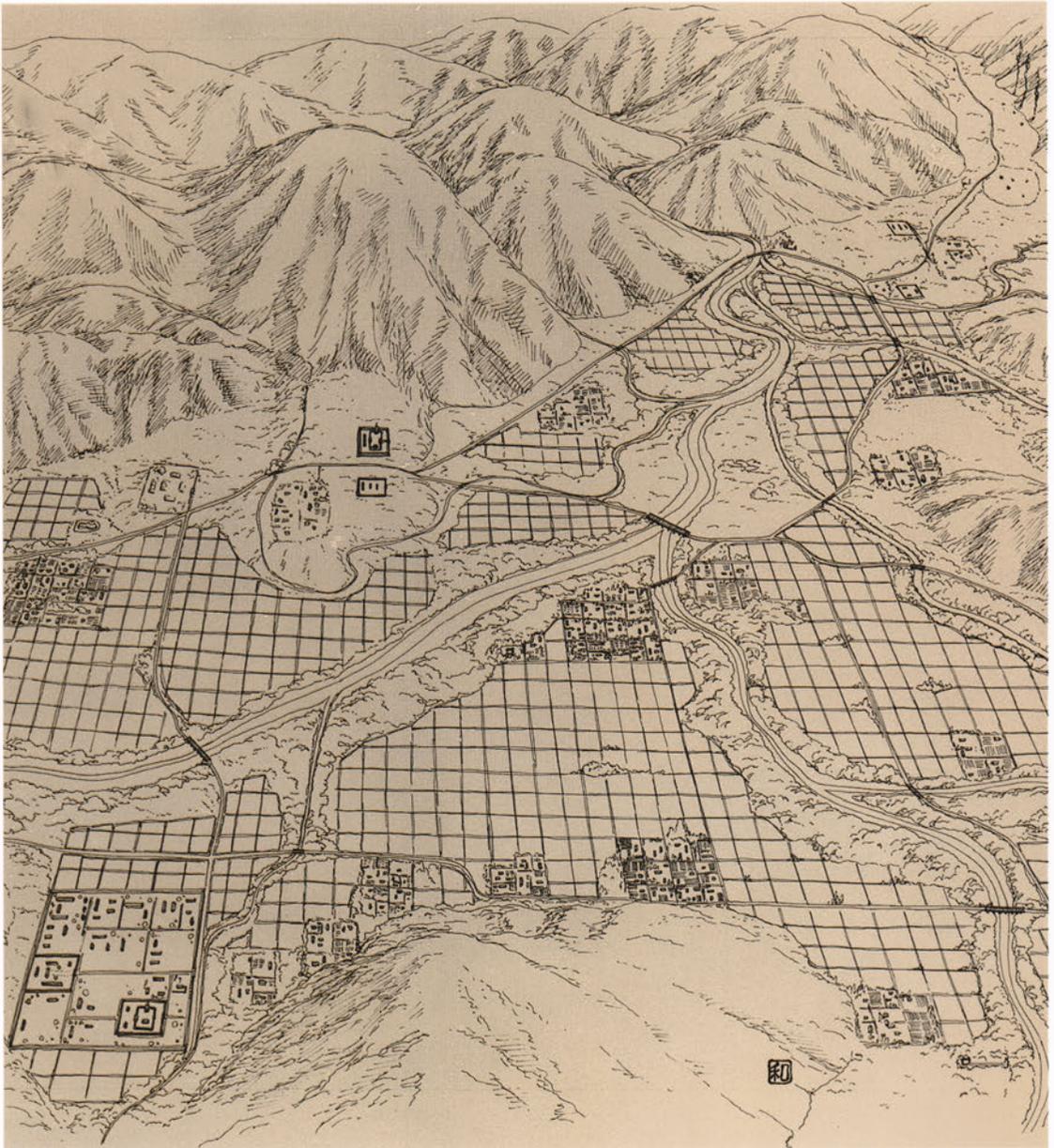


▲ ▶ 平安神宮 大極殿(上)と応天門(右)  
平安宮の10分の6の大きさ



▼ 空から見た平安京 まん中右手がJR京都駅





### 亀岡盆地の古代のイメージ

約1200年前の亀岡盆地を西の上空から見た  
 状景。手前左の建物群は、今の県庁にあたる  
 丹波国の国府、中央の2つの建物群の、上が  
 国分僧寺（国分寺）で、下が国分尼寺。右上  
 は、篠の窯（38頁参照）で、土器を焼く煙が  
 立ちのぼっている。

## 5. つく

## くる

木の型を使って布を染める。粘土で形作って窯で焼く。砂鉄から鉄を作り、これを加工して道具を作る。溶かした銅を鋳型に注いで青銅製品を作る。

京都府でも発掘調査によって大昔以来の生産の場や製品が数多く見いだされている。土器は、はじめたきび焚火で作っていたものが、中国・朝鮮半島から窯の技術が伝わり、硬く水ももれにくい須恵器が生まれ、そして丹波焼・備前焼・京焼へと移り変わっていく。

69 布を染める木の型(版木)  
岩滝町定山遺跡 12世紀

69







奈良時代の製鉄工場の復原 弥栄町遠所遺跡 B地区からA地区  
を見る。  
左上方は、砂鉄を溶かして鉄の塊を得る。右上方は、鉄塊をもう一度  
溶かして不純物をとりのぞく。右手前は、そうした製鉄の最終段階。  
左手前は、鉄を加熱し叩いて製品をつくる。



『七十一番歌合』から



70



71

## 鍛える

今から二千三・四百年前、中国・朝鮮半島から伝わった稲作文化は、鉄ももたらした。おそくとも6世紀後半には、日本でも砂鉄から鉄を作る製鉄の技術が会得<sup>えとく</sup>されていた。鉄製品に加工するには、鉄の原料を1100度をこえる高温で溶かして不純物を取り除く「製鉄」、その鉄の素材をさらに高温で焼き、叩いて製品とする「鍛治<sup>かじ</sup>」の工程がある。京都府の北部、弥栄町遠所遺跡<sup>えんじょ</sup>では、6～8世紀の製鉄炉・鍛冶炉<sup>せいてつろ かじろ</sup>と、砂鉄を溶かす燃料(炭)を焼いた炭焼窯<sup>すみやきがま</sup>が見つかり、日本古代の鉄の生産工程をそのまま再現できる数少ない遺跡である。

70・71 鍛治に使うカナヅチと火バサミ 7世紀

▼ 空から見た遠所の製鉄遺跡 左側が製鉄炉のあるA地区、右側の谷の奥のB地区に鍛冶炉がある。



## 埴輪を焼く

粘土で形作り釉薬をかけずに焼いた「土器」は、はじめ焚火で焼いて仕上げた。5世紀に朝鮮半島から窯で焼く技術が伝わり、焼物は大きく変化した。灰色に硬くしまった「須恵器」の登場である。やがて、古墳に飾る埴輪、寺や宮殿を飾る瓦、緑の釉薬をかけた緑釉陶器なども焼かれた。

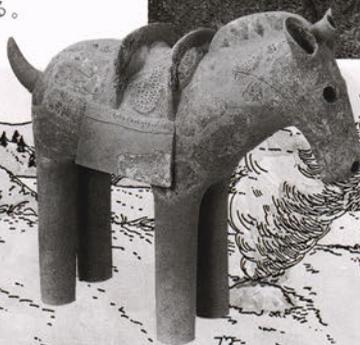
木津町上人ヶ平遺跡では、京都府ではじめて埴輪窯が見つかった。ここで作った埴輪は、窯から西へ150 m離れた台地の上の古墳（復原図右上）に運ばれている。

72・73 窯で作った円筒埴輪と馬形埴輪

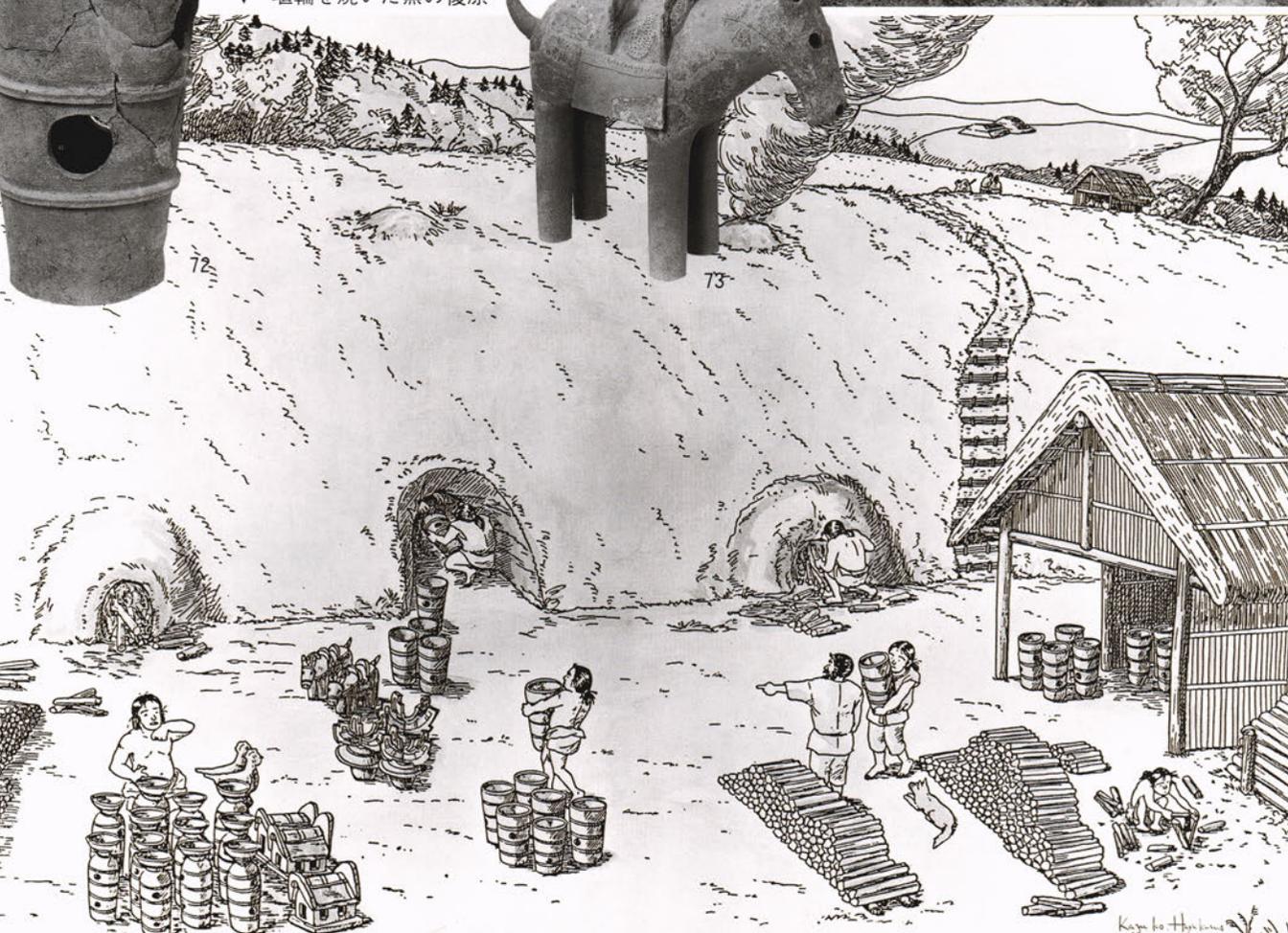
- ▶ 埴輪を焼いた窯  
焼き損じ品を放置している。
- ▼ 埴輪を焼いた窯の復原

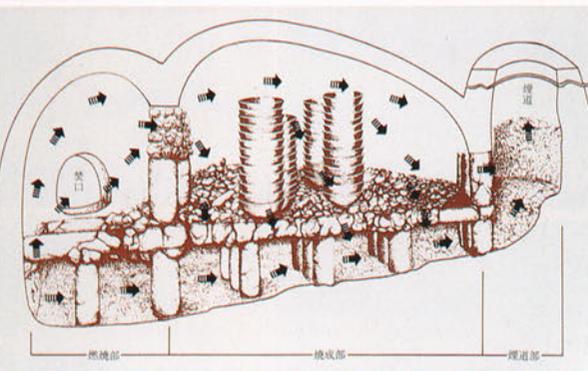


72



73





## 土器を焼く

亀岡市の篠窯跡群は、100基程度の窯があったと推定される、須恵器の一大生産地である。製品の多くは、平安京や丹波の国を治めた丹波国府などで使われた。篠の窯には、登窯のほか、燃料を入れる焚口が相対する2方向にあり、平面がおむすび形や砲弾形の小型の特殊な窯もある。この窯では、釉薬をかけた高級品の緑釉陶器を焼いている。この製品は、遠く九州福岡市平和台球場のところにあった1000年前の迎賓館(鴻臚館)まで運ばれている。

74~76 篠で焼いた日常雑器(須恵器) 10世紀

77~79 篠で焼いた高級陶器(緑釉陶器) 10世紀

- ▲ 緑の釉薬をかけた器を焼くおむすび形の窯 篠黒岩1号窯 10世紀
- ▲ 砲弾形で七輪のような火床をもつ窯 篠西長尾5号窯 10世紀
- ▲ 窯入れの様子を復原
- ▼ 窯のなかの土器



74



75



76



38

77



78



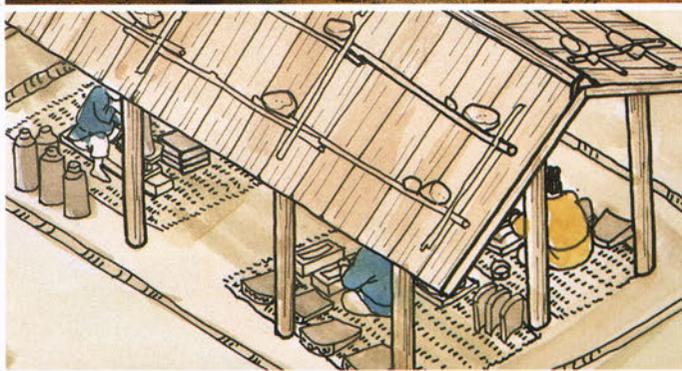
79

## 瓦を焼く

古代には、窯は丘の斜面に築く場合が多い。斜面にトンネルをくり抜く地下式登窯（窖窯）、斜面に溝を掘り、粘土で天井を作る半地下式登窯などがある。屋根瓦もこうした窯で焼いている。宇治市隼上り瓦窯は、7世紀初めころに、はるばる50kmも離れた大和飛鳥の豊浦寺に瓦を供給した。

80 豊浦寺に運んだ瓦 7世紀

- ▶ 窯詰めされた瓦 京都市蟹ヶ坂瓦窯 7世紀
- ▶ 粘土で瓦の形をつくる



80

宇治市隼上り瓦窯 1982年発掘。ここで豊浦寺の瓦を焼いていたのは驚きだった。1986年、国の史跡に指定。宇治と大和飛鳥の関係がさまざまな論じられたが、決定打はまだ出ていない。

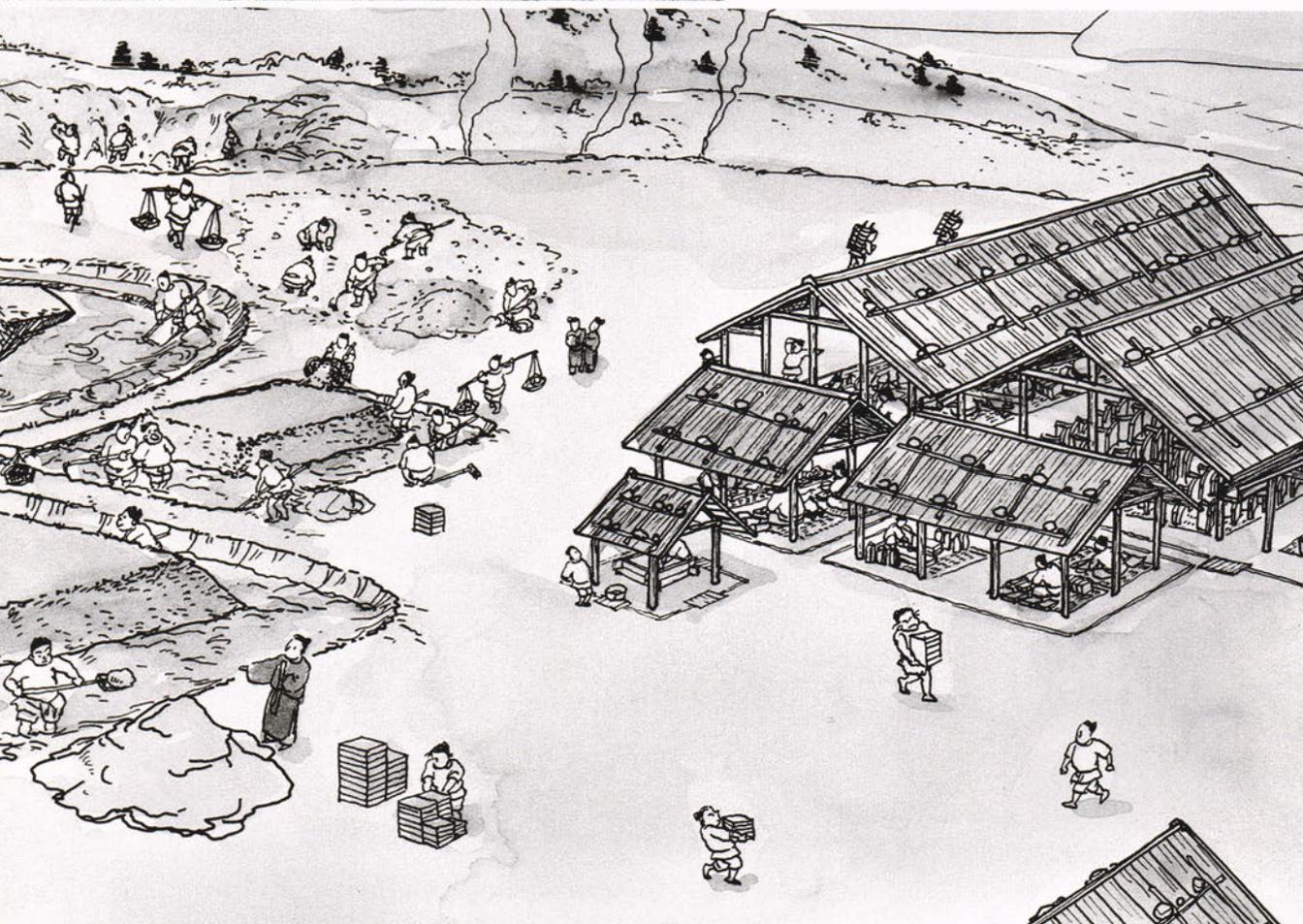


## 上人ヶ平の瓦工場

土器や埴輪・瓦を焼く前には、粘土を掘り出して、よくこねて形を造る作業が必要である。その作業場のあと(工房)の一部と見られるものは、いままでも各地の窯跡の付近から見いだされることはあった。しかし、木津町上人ヶ平遺跡では、工房から窯までの瓦つくりの全体の様子が全国的に初めて明らかになり、注目をひいている。ここでは、大きな建物や井戸が見つかった。このほか瓦工房が作られる200年も前の古墳の堀を水溜りや粘土コネ場に再利用したこともわかっている。ここで作った製品は、3.5km離れた奈良の平城宮へ運ばれ、宮殿の屋根を飾った。

▶ 古墳の堀に溜った多量の瓦

◀ 井戸に投げ込まれた瓦



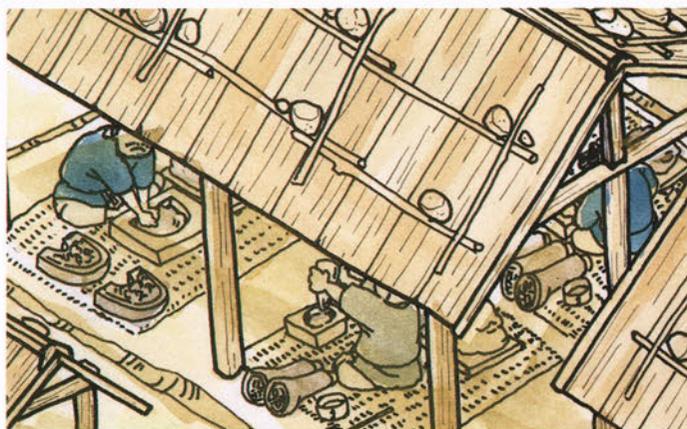
見つかった大きな建物は、1棟の面積が約300㎡。4棟が整然と並び、全体の大きさは体育館ほどの広さもある大規模な瓦工房。建物が大きいわりには柱が小さい。バラック程度の簡単な構造の建物だったのであろう（左頁復原図参照）。

## 81 鬼の顔を描いた瓦

- ▶ 型（笥）に粘土をつめて鬼瓦をつくる。
- ▲ 瓦工場の復原 粘土を採り（左上）、こね（左）、瓦をつくり（右 建物の中）、焼く（上 煙が立ちのぼっている）。
- ▼ 上人ヶ平遺跡の発掘 人の立っているのが各建物の北側の両隅にあたる。



81



## 鑄 る

銅に錫や鉛を加えて溶かし、鑄型に流し込んで青銅製品を作る。青銅製品のほかに、それを作るための道具や作業場も見つかっている。弥生時代の銅鐸鑄型は向日市鶏冠井遺跡で見つかり、寺の軒を飾った風鐸の鑄型は山城町高麗寺跡で出土している。また大きなものとしては、寺の釣鐘をつったあとも、広隆寺や京都大学の構内で見つかっている。



82



83

82 溶けた銅を流し込む銅鐸の鑄型 前2・3世紀 下は、この鑄型から作った銅鐸の復原図

83 弥生時代のカネ(銅鐸) 前2・3世紀

84・85 寺の軒につるした風鐸の鑄型 8世紀



84



85



◀ 釣鐘を作るための穴 京都市広隆寺 10世紀 穴底に鑄型を据えるための土台(定盤)を置き、鑄型に溶けた青銅を流し込む。ここでは土台の一部と鑄型を締めつけ固定する締木を据えた穴が見つっている。

## 6. 戦

稲作農耕が生活の基盤になると、水争い、土地争い、富の奪い合いがたびたび起こった。戦争の始まりである。村むらには、敵襲を防ぐための濠をめぐらし、敵を攻め敵から身を守るための武器・武具が急速に発達した。

京都は応仁の乱(1467年)以後、多くの戦乱の舞台になった。

明治維新到来。その時、新しい時代の息吹は、戦乱の傷跡を残す京都から始まったのである。

- ▶ 古墳時代の「王」が黄泉の国へもっていった鉄の剣・刀・やじり  
長岡京市恵解山古墳 5世紀

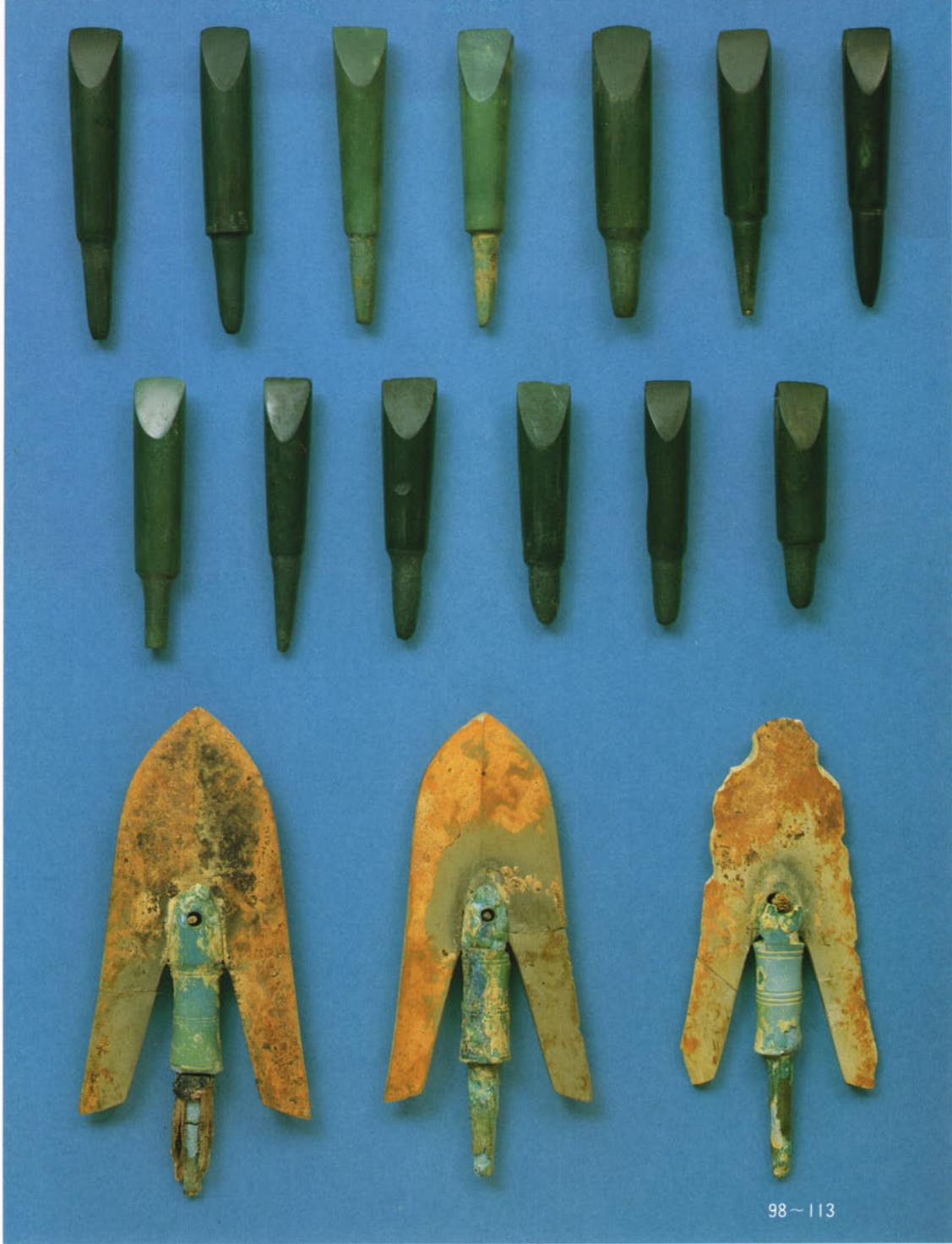




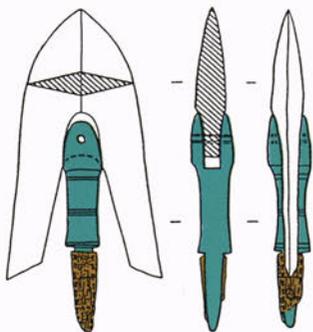
## さまざまな武器

弥生時代には、鉄・青銅・石の各種の武器が発達した。青銅や鉄の武器の威力にあやかることを望んだのか、軟らかい石で金属の武器を模倣し、村のまつりに用いた。古墳時代になると本格的な鉄の武器が発達し、またそれから身を守る武具も発達した。





98~113



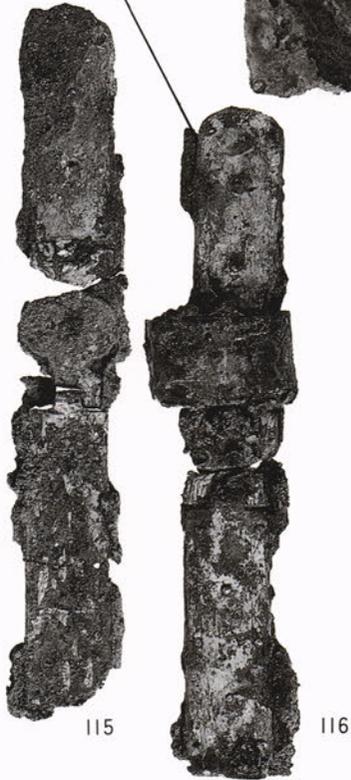
86~90 銅で作った剣を石で模した弥生時代の剣 前2~2世紀

91~97 鉄で作った古墳時代の剣・刀・鉞・やじり 5世紀

91はもともと曲がっている蛇行剣

98~113 銅のやじりを軟らかい石で模したまつり用のやじり 4世紀

111~113は、左の図のように、先の部分を石で作り銅の根元にはさみこんでいる。



114~116 矢筒(胡録)に使う革ベルト金具  
 117 頭とくびを守るかぶと  
 118・119 胸を守るよろい

## 武具と馬具

- 120・121 馬の尻を飾る金具
- 122 革ベルトの交差部を固定する金具
- 123 馬の口にかませ手綱をつける金具
- 124 ベルト金具
- 125 鞍につく金具
- 126 人が乗る座席(鞍)の前か後ろに付く板

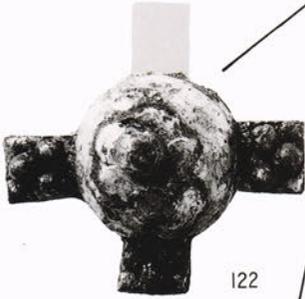
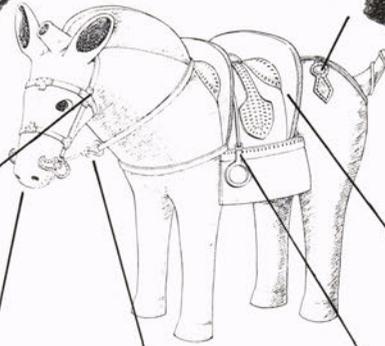
武具には甲よろいと冑かぶとがある。戦場を駆ける兵士たちは防ぎには弱い動きやすいように木や革の軽い甲を着けた。「王」や将軍は、防ぎに重点を置き、重い鉄の甲を着けた。馬につける馬具も実用の部品だけのものと、位の高いひとをきらびやかに飾り立てるものがあった。



120



121



122



126



123



124



125



## 壕 と 堀

世界の各地の都市や町では、古代以来、濠をめぐらし、垣を囲むなど常に防御の施設をともなっていた。しかし、日本で村や町が防御施設をもつのは、弥生時代と応仁の乱(1467年)前後数百年間の2回だけであった。京都府でも、丘の上に2条の濠をめぐらせた峰山町おおきだに扇谷遺跡など弥生時代の守りの村が見いだされている。中世以来の城跡も多いが、なかでも綾部市平山城館跡には、攻め登ってくる敵を畑の畝と溝のように縦方向に掘ったたてほり堅堀で迎え撃ったあとが見事に残っている。

▲ 村をとり囲むV字形の環濠 深さ3m 峰山町扇谷遺跡 前2世紀



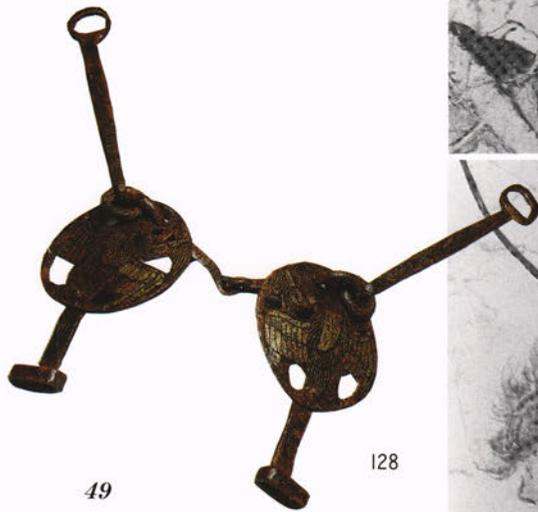
▲ 急斜面に幾条も掘られた豎堀 綾部市平山城館跡 16世紀

127 武将のかぶとにつけた鍬形と呼ぶ飾り 12世紀

128 馬にかませ手綱をつける金具 12世紀



127



49

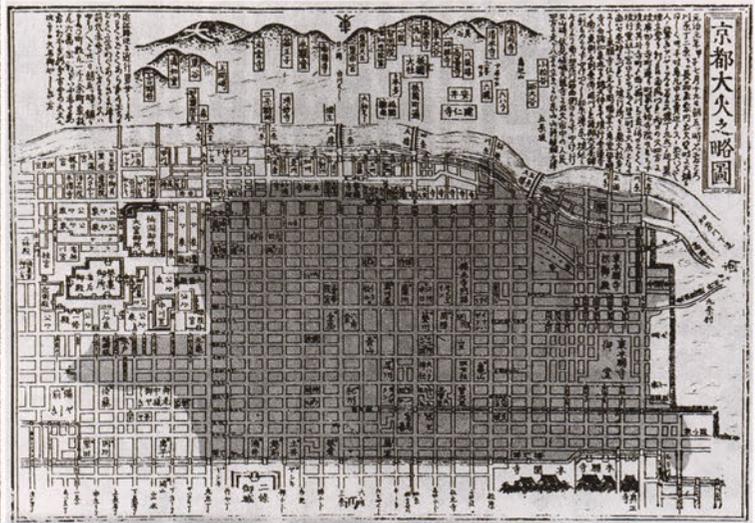
128



## 土の層に見る戦乱のつめ跡

京都市内では、平安遷都以後、引き続いて人々が生活を営んだ。人々が時代ごとに整地・造成を行ったようすは、土の層を観察することで確認できる。ここにあげた土層には、火を受けて赤く焼けた層がある。これは、長州藩（山口県）の武士たちが天皇を奪取するため御所で会津・薩摩連合軍と戦った蛤御門の変（1864年）<sup>はまぐりごもん</sup>によって起こった火災の跡である。ただの「赤い層」も大切な歴史の証人である。

▲ 炎上する京の町 ◀ 土層に残る焼土層 ▼ 炎上した範囲



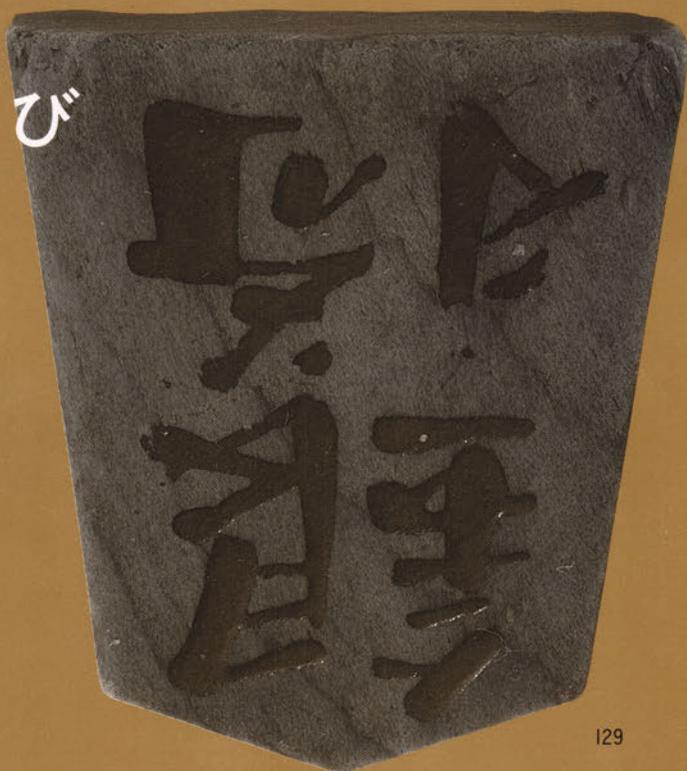
## 7. 遊

日本人は、どんな遊びをしてきたか。囲碁は奈良時代、将棋は平安時代から、主に支配者、知識階級の人々の遊びとしてわが国に定着してきた。時代は降って伏見人形は、安土桃山時代から江戸時代初期に成立した玩具である。型作りによって大量生産を可能にし、商品化され広く一般庶民層に愛されたという点において、現代のおもちゃの源流となった。京都は、遊びの世界においても、先駆的役割を果たしてきたのである。

129 木製の将棋の駒 京都市南区  
御土居跡 17世紀

130 陶製の将棋の駒 宇治市集上  
り遺跡 18世紀

び



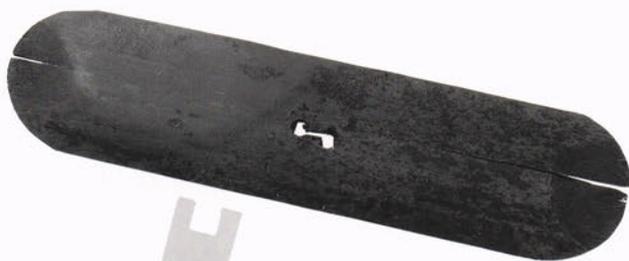
129



130



131



133



132



136

135



134



138

137



139



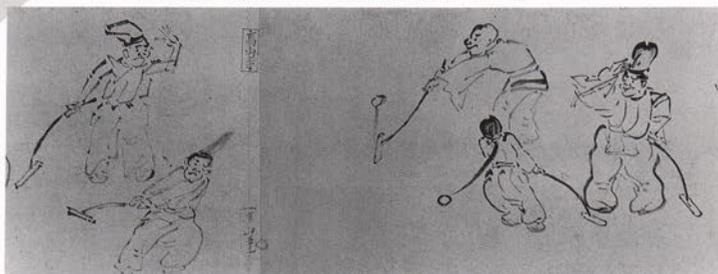
140

## 遊びの数かず

記録によると、持統3年(689)に雙六賭博禁止令が出されたというから、中国から伝わった雙六は、飛鳥時代にはかなり普及し、賭も始まっていたことがわかる。囲碁も中国伝来の遊びで、奈良時代以降多くの人々に親しまれてきた。将棋は、中国象棋が日本化されたものだが、11世紀には成立し、現在

- 131 羽子板
- 132 独楽
- 133 竹とんぼ
- 134~136 独楽
- 137~139 木球
- 140 毬杖

▼ 毬杖遊びのようす 『鳥獣人物戯画』から





141

に至っている。羽子板・独楽・毬杖は、手鞠・凧あげなどとともに、毎年正月に、一年の吉兆を願って行われた遊びである。毬杖は、T字状の打棒で球を打ち合う競技で、現代のゲートボールやゴルフに似た遊びである。平安時代から江戸時代(『洛中洛外図』)までは続いた遊びだが、今は見られない。

これらの遊び道具を出土品の中に求めると、長岡京跡から出土した碁石・独楽が京都で最も古い。将棋の駒は、鳥羽離宮跡や平安京跡から平安時代以降のものが出土している。珍しいものとして、コバルト(呉須)で文字の染付をした白磁の駒がある。竹とんぼ、雙六のサイコロ、羽子板などの多くは近世以降のもので、庶民の間に各種の遊びが定着した年代を物語っている。



141 羽子板  
130・142・143 将棋駒  
144 泥めんこ  
145・146 碁石  
147 サイコロ  
148・149 碁石



144



148

149

145

146

147

## 庶民の玩具 おもちゃ

伏見人形の源流は、16世紀の遺跡から出土する猪や犬などを手びねりで作った中実の土製品に求めることができる。これと同じ形をした中空の土人形を、型作りによって大量生産したのが伏見人形である。天正3年(1575)銘の福祿寿の原型が伝世されている。16世紀の後半には、深草の地で伏見人形の技術が完成し、伏見稻荷神社の参道などで京みやげの玩具として売られて、広く庶民に愛されるようになっていった。伏見人形や泥めんこの題材には、大自然の景観を除く、人間をとりまくありとあらゆる事物が選ばれたが、とくに民間信仰に根ざした縁起物や十二支などの動物が多く扱われた。



150~158



159



160

150~158 泥めんこ 18世紀

159 猪形土製品 16世紀

160 犬形土製品 16世紀

161~164 伏見人形 18世紀



161



162

54

163

164

## 8. 音

現在、私たちの周りにはさまざまな音がみちあふれている。音は、生活の場にやすらぎと活力を与えてくれる反面、<sup>いやおう</sup>否応もなく耳に入り込み、騒音で悩まされることも多い。過去の暮らしに思いをめぐらす時、音は重要な役割や効果を果たしてきた。音は<sup>ひそ</sup>微かな余韻を残して瞬時に消え去り、後には何も残さない。ここでは、遺跡から出土した、音を出す道具・楽器を集め、昔の人の音に対する感受性の一端にふれてみたい。

### 165 弥生時代のカネ

木津町相楽山銅鐸 1・2世紀

▶ 平等院鳳凰堂の楽器をひく菩薩像



165



166



167

## 神を呼ぶ金属の音色

鈴や鐘の音には、ある種の霊的な気配が感じられる。神を迎えるためには音が必要であった。いまは青緑色にさびている青銅の鳴物は、作られた当初はまばゆい金色の光を放ち、そこから生ずる音の響きは、神のおとずれを願うにふさわしい効果を発揮した。内部がうつろになった鐸や鈴は、振るといふ動作そのものにも意味が込められていた。

- 166 長岡京の銅の鈴 8世紀
- 167 花形に飾った鍍金した銅の鈴 12世紀
- 168 叩いて音を出す仏具(磬) 16世紀
- 169 祭りの場で鳴らした弥生のカネ(銅鐸)  
前2・3世紀
- 170 馬に吊りさげたカネ(馬鐸) 6世紀
- 171・172 寺の堂塔の軒に吊りさげたカネ  
(風鐸) 8世紀



168

▼ 田の豊作を祈願する祭りの風景  
『浦島明神縁起絵巻』から

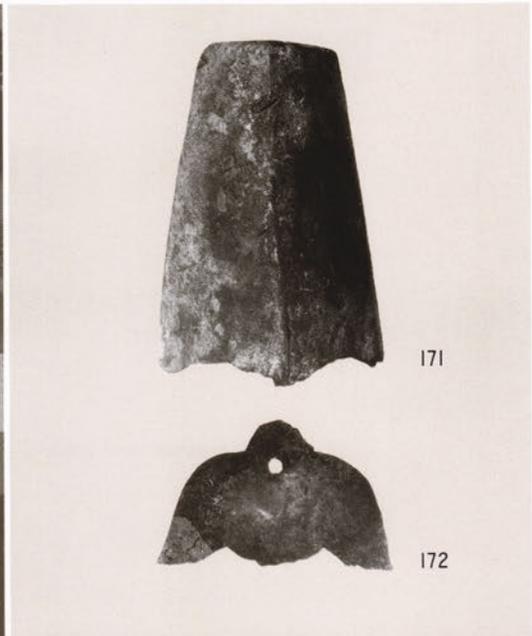
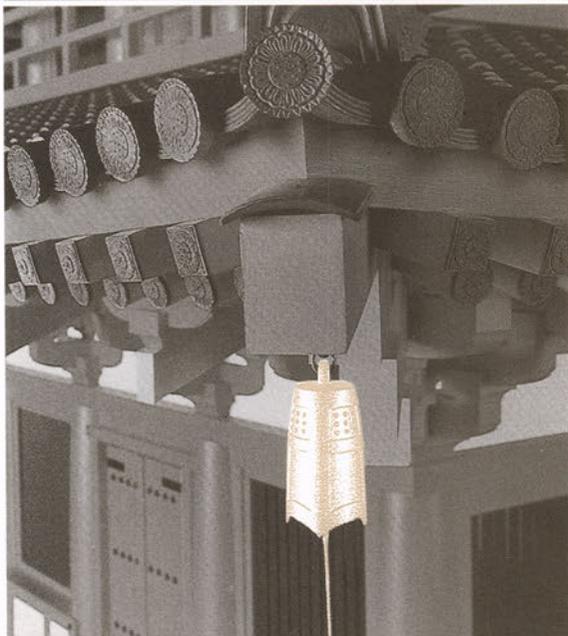




169



170



171



172

## さまざまな音色



173

中国の半坡遺跡(西安市)から約4000年前の、土で作った笛が見つっている。中国古代の文献に出てくる「埴<sup>けん</sup>」と形が似ているところから「陶埴<sup>とうけん</sup>」と呼ばれているが、同形のものが丹後地域を含めた日本海沿岸の弥生時代の遺跡から見つっている。卵形で片方に吹き口がある。側面に開けたいくつかの穴で音程を調整したらしい。その音色は、日本海をわたる風の音のように高く澄んでいる。



174



173 弥生人の吹いた土の笛 前2世紀

174 祭りで使った鹿角製の楽器(ササラ) 6世紀  
何本もの刻み目をつけた動物の骨や角を互いにこすり合わせて音を鳴らす。現在でも、竹で作ったササラが祭りで使われる。棒の下の紙のふさは飾り。



175

175 弥生時代の琴の板  
3世紀  
時代は下るが琴ひく男の埴輪のように膝の上において鳴らしたのだろう。



## 9. 花

花は、人の誕生以来、いつも身近なものだった。しかし、木や花を造形作品として表わす歴史は、意外に新しく、埴輪や鏡に描いた樹木が最も古い。最古の花の表現は、寺の瓦を飾った蓮の花文様であり、釉薬をかけた陶器の宝相華文である。つまり、仏教とともに伝わったものだ。日本独自の花の表現は、中世の瀬戸焼の秋草文に始まり、近世に盛んになった。都市に住む町人たちが、花を愛でるようになったからである。

176 大きな皿に描いたチューリップのような花 南中国産 京都市上京区下立売通新町西入 17世紀



176



## 日本最古の 樹木の表現

4世紀に築かれた与謝郡加悦町  
作山1号墳の円筒埴輪に描かれた  
樹木。これは、奈良県の佐味田宝  
塚古墳の家屋文鏡の家のかたわら  
の木とともに、日本最古の樹木の  
表現である。まっすぐにそびえた  
つ2本の木の間、親子の鹿が向  
きあっている。何を語らっている  
のか、顔の部分が欠けていて、表  
情が読みとれない。



177 円筒埴輪に描かれた樹木 4世紀  
◀ 佐味田宝塚古墳の鏡に描かれ  
た樹木 4世紀



177の樹木の拡大



178



181



179



182



180



## 日本最古の 花の表現

7世紀、日本で初めて花の意匠が造形される。寺の瓦を飾った蓮の花の文様である。その意匠は、蓮の花とわかるもの、似て非なるもの、華やかに飾りつけたものなど、まさに百花繚乱である。しかし、こうした花は、仏教にともなって中国・朝鮮半島から伝わったものであり、日本人がみずから描きだした花ではない。釉薬をかけた陶器に描いた花もまたしかりである。古代には、詩に花を詠み、花見の宴で花を愛でながら、なぜか日本独自の造形は生まれなかった。

178～182 軒丸瓦の蓮の花文様 7～12世紀

◀ 蓮の花



183



184

## 中国ふうの花の表現

9世紀以降、緑色の釉薬うわぐすりをかけた高級な陶器に、さかんに花の文様が描かれる。これは、実在の花を描いたものではなく、仏教思想の仮空の花「宝相華文」ほうそうげもんだという。しかし、細密に描いたものは、ボタンやフヨウに似ている。中国人の花の好みがここにもでている。

183～185 緑釉陶器に描かれた空想の花 9世紀



185

## 庶民の花

日本人が描いた日本の花の造形は、12世紀ごろの陶器の秋草文に始まるといってよい。しかし、数は少なく、特別のものだったらしい。ススキ・キキョウ・オミナエシ・アヤメなどの草花の意匠が盛んにもちいられるようになるのは、16世紀の後半、信長・秀吉の時代からである。江戸時代には、それまで武士・僧侶の間で行われていた盆栽・立花<sup>りっか</sup>などの園芸が、経済力をつけてきた町人の間に急速に広まっていく。花もその造形も、ようやく庶民の生活のなかにとけこんできた。



186



187



188



189

186 タンポポ (志野向付)

京都市上京区室町通樺木町下ル

187 草花 (黄瀬戸茶碗)

京都市上京区下立売通千本東入

188 キキョウ (黄瀬戸向付)

京都市上京区烏丸通上長者町上ル

189 ボタン (京焼皿)

京都市上京区烏丸通今出川上ル

# 10. う つ わ

日本の器は、一万二千年前に生まれた素焼きの土器に始まり、釉薬（すいやく）をかけた陶器、石の粉末を使った磁器（やきもの）に発展した焼物のほか、木や金属の器もある。その器の用途も、はじめは水・食料の煮炊きや貯蔵だったのが、死者の霊をしずめる道具や見て心をなごませる道具としても使われるようになる。身近な器のなかにもその時々の変化を垣間見ることができる。

190 鎌倉時代の火鉢 京都市左京区  
吉田近衛町遺跡 14世紀

▶ 『絵師草紙』に描かれた火鉢





193 194 195



191



192

## まつりのうつわ

神や祖先の祭り、死者をなぐさめる祭りには、日常の器のほか、特別な器を使うこともあった。祭りの器は、器本来の用途から離れ、いろいろな飾りがついている。そして葬式に使った器は、そのまま埋めることが多い。

191 涙の形の透し穴のある器の台上に壺をのせる 3世紀

192 櫛の歯先のような道具でびっしり模様をつけた器 2世紀

193~195 台にのせた壺を一体でつくった土器 蓋に壺の形のつまみをつける 6世紀

196 口を切りとった水筒 まん中に穴があいていて、水はあまり入らない 7世紀

197 吊り手を馬の飾りにかえた水筒 6世紀



196



197

## 貯えるうつわの移り変わり

2200年前

弥生時代前期



202

1800年前

弥生時代後期



203

1700年前

古墳時代前期



204

1300年前

古墳時代後期(須恵器)



205

66



198



199



200

## 珍しいうつわ

生活に余裕ができると趣味・嗜好<sup>しこう</sup>によって  
さまざまに飾りつけた器が生まれた。これらの  
器は、はじめ裕福な人びとの独占物であり、  
やがて趣味の世界で愛好された。

198 緑の釉薬をかけた四足の壺 9世紀

199・200 緑の釉薬をかけたカマドと羽釜  
実際に火にかけることはない  
9世紀

201 故意に歪めてつくった織部焼の抹茶  
茶碗 17世紀



201

1150年前

平安時代(須恵器)



206

650年前

室町時代(常滑焼)



207

67

600年前

室町時代(常滑焼)



208

350年前

江戸時代(丹波焼)



209



210

## 煮炊きのうつわ

煮炊きの器は、はじめ地面に穴を掘り、石で固定するなどして使っていた。やがて作りつけや移動できるカマド、鍋や釜を固定する道具が生まれた。

210 蒸し器(甑) 横から(左)と底から(右)みる  
6世紀

211~213 蒸し器・ナベ・移動式カマドの  
3点セット 6世紀

214 三本の足をつけた釜

215 つばをつけた釜



211

212

213

▼ 『西行物語絵巻』に描かれた煮炊きの風景 脚のついた輪状の器具(五徳)に羽釜をかけている。



214

215

## 煮炊きのうつわの移り変わり

8000年前

縄文時代前期



224

2200年前

弥生時代前期



225

1900年前

弥生時代中期



226

1700年前

古墳時代前期



68

227

## 椀 と 播鉢

いま私たちが使っている磁器の飯盛り椀は、<sup>めしも</sup>京都では江戸時代になって流行したものである。それ以前の椀は、素焼きのもののほか、緑や灰色の釉薬をかけたもの、瓦のような<sup>うわぐわ</sup>肌のものなどがある。いまの汁椀の先祖にあたる<sup>うるしぬ</sup>漆塗りの椀は、奈良時代には出現していたが、盛んに使われるようになるには、京都でも江戸時代になってからである。

<sup>すりばち</sup>播鉢は、はじめ小さなこね鉢だったが、室町時代(14世紀)に粗い縦筋をいれるようになる。いまの播鉢の原型である。

216 灰色の釉薬をかけた椀(灰釉陶器) 9世紀

217 水もれしにくいように、ていねいにみがいて黒く焼きあげた椀(黒色土器) 9世紀

218 家紋をいれた漆塗りの椀 17世紀

219 全面くすべ焼きした椀(瓦器) 13世紀

220 中国製の青色の椀 13世紀

221 底にすべり止めの穴があるこね鉢 9世紀

222 1本ずつすり面に筋をいれた播鉢 14世紀

223 4本ずつまとめて筋を入れた播鉢 17世紀

▶ 『病草紙』に描かれた播鉢



216



217



218



221



222



223

219



220



1300年前  
古墳時代後期



228

1150年前  
平安時代



229

850年前  
室町時代



230

350年前  
江戸時代



231

## 金属のうつわと 土のうつわ

古代には、青銅の器や銅と錫と鉛の合金で作る佐波理の器がある。これを使えるのは、ごくわずかな上流の人だけだった。人びとは、こうした金属器にあこがれ、その形をまねた土器を作って用いた。



232・233 青銅の鉢 7世紀

234 銅鉢をまねた須恵器 8世紀

235・236 佐波理鉢・蓋をまねた  
須恵器 8世紀

237 たんぽ  
痰壺の形の緑釉陶器 8世紀

238 銅の水差し形の壺をまねた須  
恵器 7世紀

239 銅の経筒 13世紀

240 銅の経筒をまねた土製品  
13世紀

佐波理の鉢と蓋

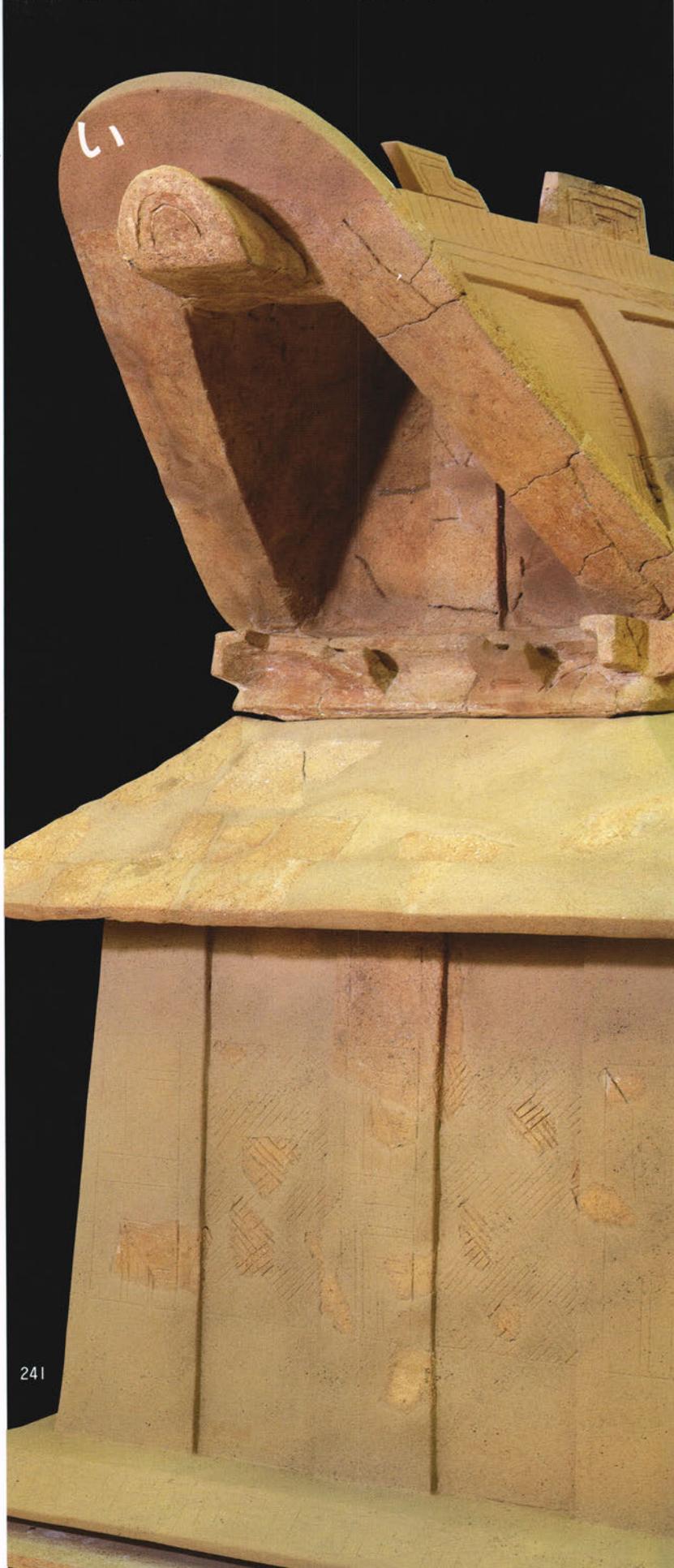
銀の壺

銅の壺

# 11. 住 ま い

稲作農耕が始まって、有力な人が出現しても、彼らは村の中に住んでいた。古墳時代には、有力者は、村から離れて邸宅を構えるようになった。広い庭園をもつ寝殿造り住宅は、平安京で完成し、現在にいたる高級住宅の原型となった。いっぽう、古代の農家は、ほぼそのままの形で最近にまでいたり、江戸時代に生まれた京都の「うなぎの寝床」の町屋は、狭い土地を最大限に利用した、いまの庶民の住宅のはしりである。

241 古墳時代の豪邸  
城陽市丸塚古墳 5世紀



241



- ▲ 木津川に臨む縄文時代の村の復原 城陽市森山遺跡 縄文時代後期
- ▼ 古墳時代の村の発掘 新旧の竪穴住居が重なりあっている 福知山市石本遺跡 6世紀



## 家のはじまり

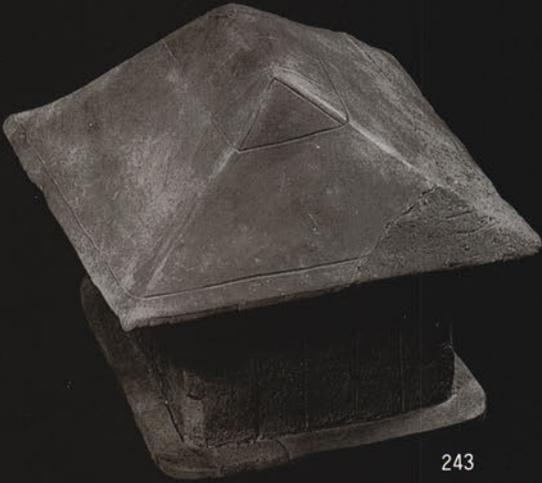
日本における、雨風をしのぐための最初の家は、半地下式の竪穴住居である。冬は暖かく、夏は涼しい。住居の面積は、大小あるが、平均で10~20㎡、いまの6畳一間でいどに4~5人が住み、数軒で村をつくっていた。



242



244



243



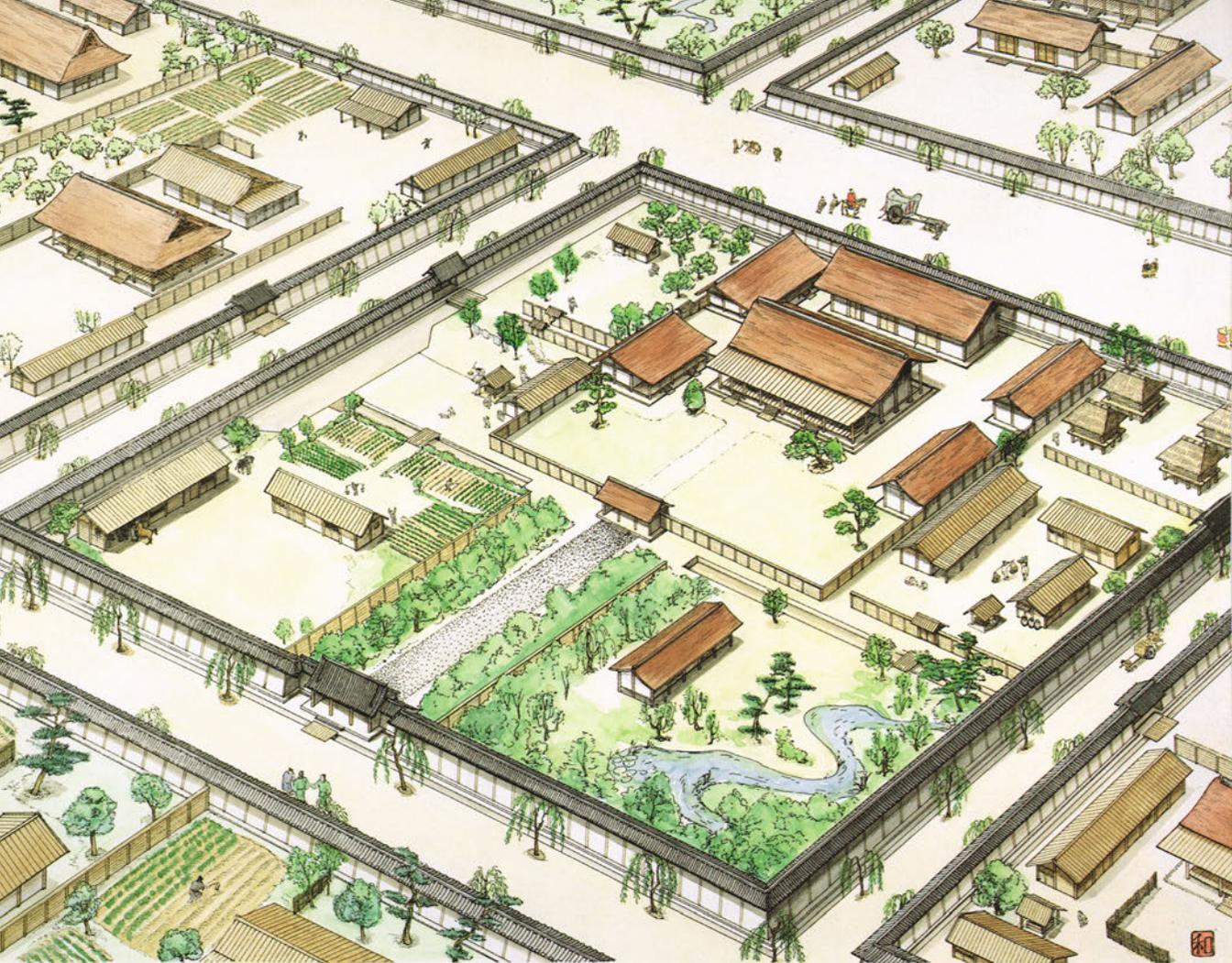
245

### 宇治市庵寺山古墳の家の埴輪

屋根の形も大きさもさまざまな家や倉の埴輪が7軒分見つかった。中には、二階建ての高殿もある。そのうち4軒を並べた状況。奥の大きな家が中心の建物か。

## 豪族の邸宅

古墳時代になると、支配者は、みずからのために巨大な墓を築く。住まいもまた、村から離れて、大規模な邸宅を構えるようになる。古墳の頂上に並べた家の埴輪は、その邸宅を表わしたものである。



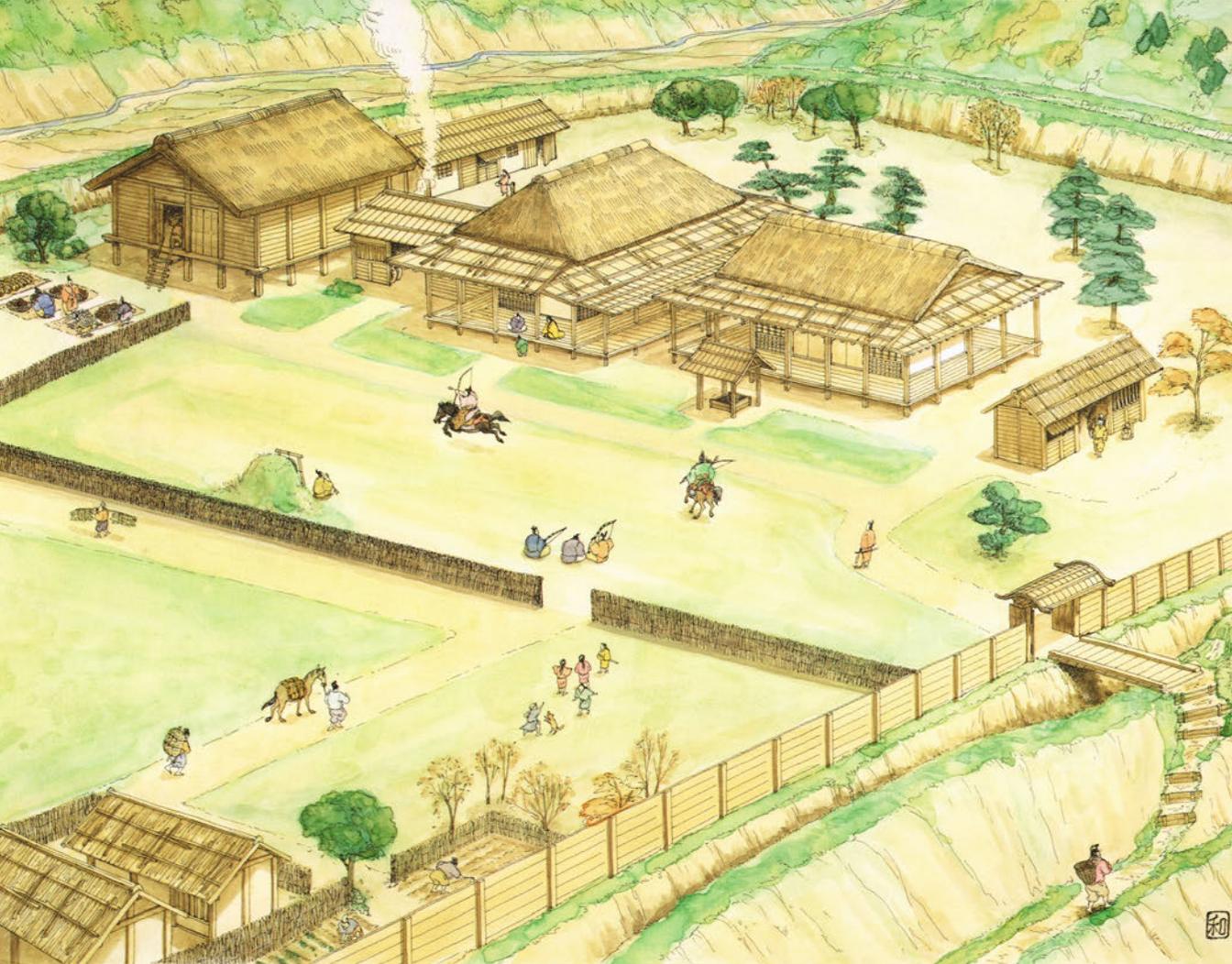
▲ 平安京右京一条三坊九町の貴族邸の復原 8・9世紀

▼ 平安京右京一条三坊九町の発掘 掘立柱の穴が整然と並んでいる



## 平安京の貴族の邸宅

都の宅地の大きさは、身分によって決まっていた。高級貴族は1町（14400㎡）以上、下級役人は16分の1町、庶民は32分の1町（450㎡）だった。高級貴族は、広大な敷地に、<sup>ひのき</sup> 桧の皮を葺いた屋根に白木造りの住宅を建て、庭園、倉庫、<sup>うまや</sup> 厩や多くの使用人の家があり、まわりは塀で囲っていた。



## 12世紀の地方豪族の館

都以外に住む豪族は、都の貴族の<sup>しやう</sup>荘園の管理者となった。彼らの中から武士が生まれてくる。こうした豪族の館は、見晴らしのよい高台にあり、板塀で囲った敷地の一方に、主人の住む家や台所、倉庫、厩などを建て並べ、前面の広庭で、税を徴<sup>と</sup>り裁判を行い、時には流鏝<sup>やぶさめ</sup>馬などの武芸を楽しんだ。こうした館は、中世になると、城郭に改造されることが多い。

- ▲ 大内城跡の館の復原 税を徴収し（左上）、流鏝馬を楽しんでいる（中央）
- ▼ 福知山市大内城跡の発掘 主人の住む家250㎡（76坪）





246



247

## さまざまな家

家の埴輪には、二方に屋根の傾斜面をもつ<sup>きりつま</sup>切妻造り、四方に傾斜面をもつ<sup>よせむね</sup>寄棟造り、寄棟造りの上に、さらに切妻造りを重ねた<sup>いりも</sup>入母屋造りの各種がある。屋根の頂き（大棟）が建物の軒よりもずっと外まで張り出している（「転び」が強い）ものが多いことが特徴である。屋根や壁にさまざまな飾りをつけた入母屋造りの家をもっとも格の高い建物だった。

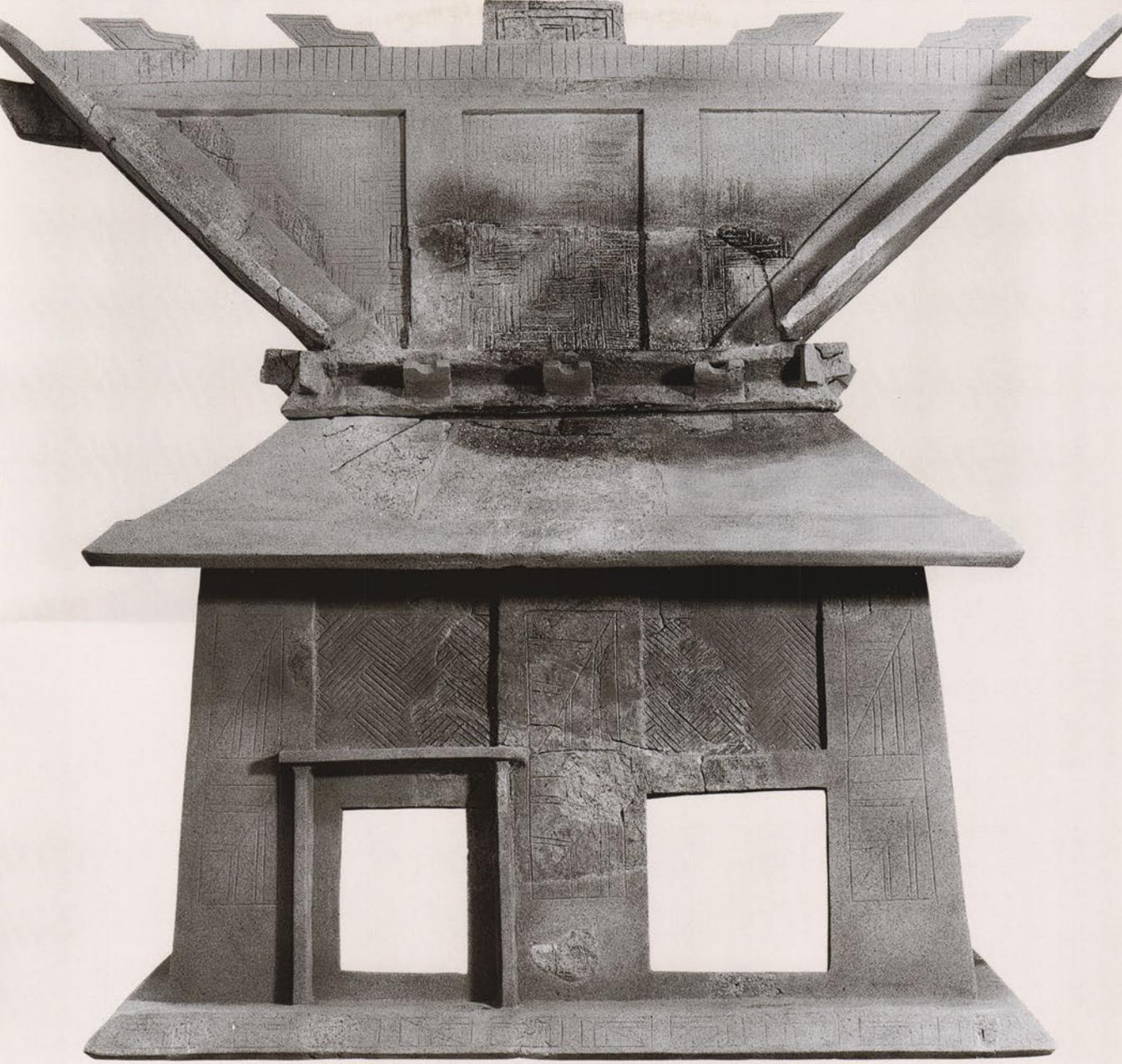
- 246 切妻造りの家 6世紀
- 247 寄棟造りの家 6世紀
- 248 入母屋造りの家 5世紀
- 249 入母屋造り二階建ての家 6世紀
- 241 飾りたてた家 京都府最大、最高の飾りつけ 5世紀



248



249



241

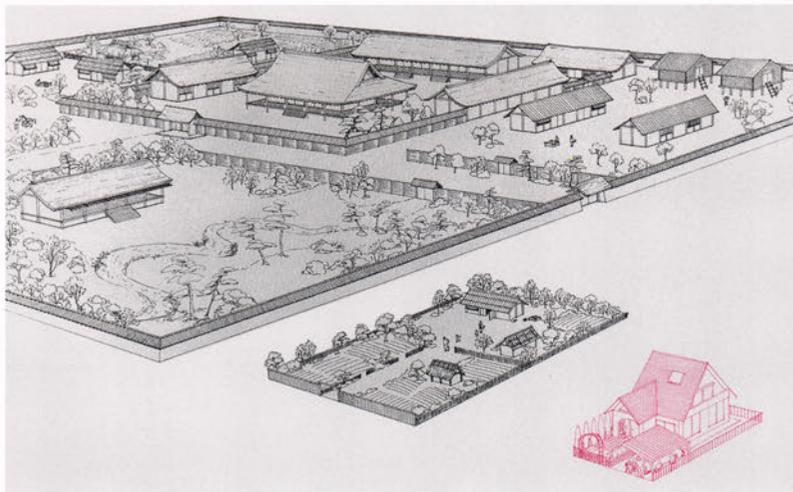




▲ 寝殿造り邸宅の復原模型 平安京右京六条一坊五町 9世紀

## 住宅事情いまむかし

平安時代の高級貴族は、広大な敷地に、100~300㎡の<sup>でんしゃ</sup>殿舎を5軒ほど建て、接客・宴会や読書・食事・就寝などに使い回していた。下級役人の宅地は900~1500㎡、庶民の宅地は450㎡、屋根を板や草で葺いた、せいぜい20~30㎡の建物が2・3軒並ぶていどだった。現代サラリーマンの住宅と比べて、<sup>うらやま</sup>宅地面積はずっと広くて羨しい。しかし、郷里を離れて薄給にあえぐ彼らの生活は苦しく、敷地の片隅で自家菜園を耕して、生計の足しにしていたのである。



- ◀ 新旧の住宅の比較
- 左 平安貴族
  - 中 平安時代の庶民
  - 右 現代サラリーマン

## 12. 調査研究10年

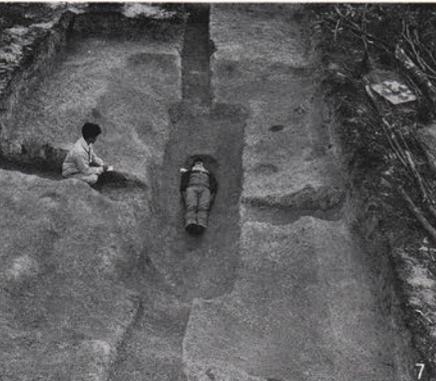
1989年、全国から文化庁に提出された遺跡内での土木工事の届出数は19471件。このうち京都府内全体の届出数は1621件にたっており、大阪府に次いで全国で第2位(8%)を占め、このうち191件を発掘調査している。

1981年に発足した財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、現在までに340回の発掘調査を重ねており、多くの重要な事実を明らかにした。そして、綾部市私市円山古墳、亀岡市篠窯跡、八幡市狐谷横穴群を初めとする18件は、幸いにして保存することができた(部分保存を含む)。

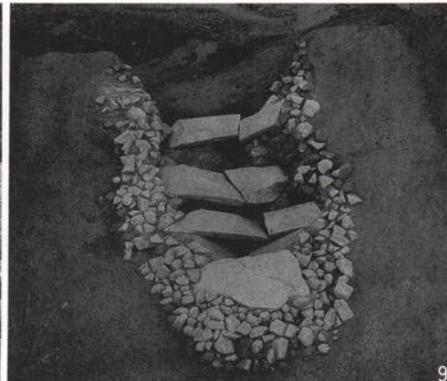
今回当調査研究センターの10周年を迎えるにあたって、この10年間、当センターおよび京都府、京都市ほか府内7市16町、大学、研究機関が発掘した成果を展示する機会にめぐまれた。以下そのうち主要な104遺跡の概要をあげ、その報告文献をかかげることにした。

▶ 綾部市私市円山古墳の現地説明会



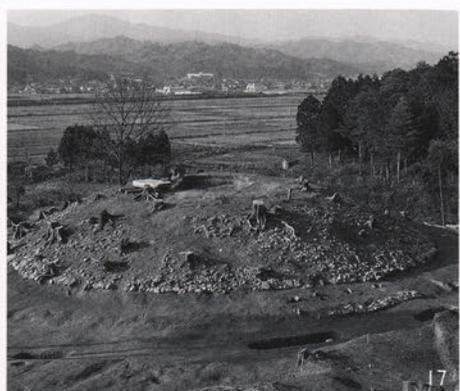


- 1 湯舟坂2号墳 ゆふねさか 熊野郡久美浜町須田、1981年9月～11月、町教委調査。久美浜湾に流れ込む川上谷川の上流にある。円墳(直径17.5m)で、横穴式石室(全長10.58m、支室長5.7m)をもつ。古墳後期(6世紀後半)。金銅装双環頭大刀が出土。他に200余点の須恵器や銅鏡・馬具などが出土している。『町報告』7集。1983年に重文指定。府史跡。
- 2 日光寺遺跡 にっこうじ 熊野郡久美浜町浦明、1988年7月～1989年1月、1989年5～10月、センター調査。段丘上にある集落遺跡。弥生中期から鎌倉時代(2世紀～13世紀)の遺構を検出。奈良時代(8世紀)の須恵器蓋杯を納めた土坑や青磁碗が副葬された中世墓、青白磁小壺などが出土しており、庄官クラスの有力者の存在を想起させる。『概報』37冊。
- 3 網野銚子山古墳 あみのちょうしやま 竹野郡網野町網野、1985年7～9月、1986年3月、町教委調査。福田川の左岸、日本海を臨む丘陵上にある。古墳からの眺望は絶好。全長198mを誇る京都府最大の前方後円墳である。古墳前期(4世紀)。周辺には直径36mの小銚子古墳などもあり、丹後地方に君臨した首長の奥津城である。府報告1冊、『町報告』5集。国史跡。
- 4 竹野遺跡 たかの 竹野郡丹後町竹野古馬場ほか、1967年8月、1982年10～11月、1986年9月～10月、府立峰山高校、町教委調査。竹野川の河口の砂丘上にある弥生前期(紀元前3世紀)から鎌倉時代(13世紀)の複合遺跡。ヘラ描き流水文を施した弥生前期の壺は著名。丹後地方最古の弥生遺跡。『町報告』2・3集、『考古学雑誌』56巻2号。
- 5 大山墳墓群 おおやま 竹野郡丹後町大山、1981年6～11月、町教委調査。竹野川左岸の丘陵上にある墳墓群。弥生中期～古墳前期(2～4世紀)。9基の台状墓と2基の古墳からなる。後期の台状墓は6基、大小の木棺28、土器棺9がみつかった。供献土器や銅鏡・鉄鏡・工具・玉類などの副葬品が出土、何世代かにわたる有力家族の墓とみられる。『町報告』1集。
- 6 高山12号墳 たかやま 竹野郡丹後町徳光、1986年7月～1987年3月、1987年4～5月、1987年6月～1988年9月、センター調査。直径18mの円墳で、横穴式石室の全長は12.15m。古墳後期(6世紀後半)。金銅装双環頭大刀2点、銀象嵌を施した円頭大刀柄頭・柄縁金具、須恵器の特殊扁壺などが出土。当該地域一帯の首長墳か。『概報』29冊、『情報』30号。
- 7 太田南2号墳 おおたみなみ 竹野郡弥栄町和田野太田、1990年2～3月、町教委調査。竹野川左岸丘陵にあり、大宮町～弥栄町を広く見渡せる。22m×18mの方墳で、舟底状を呈する木棺を直葬する。主体部から鏡・剣・土師器(鼓形器台・台付壺)が出土。鏡は船載の画文帯環状乳神獸鏡で、紐に龍文を施すのは全国的にも例が少ない。
- 8 遠所遺跡 えんじょ 竹野郡弥栄町木橋遠所、1987～1990年4月～調査中、センター調査。平野から奥まった丘陵と谷に広く展開。古墳22基以上と古墳後期から奈良時代(6～8世紀)にかけての製鉄炉・鍛冶炉・炭窯・焼土坑・須恵器登窯・竪穴住居・掘立柱建物・流路・溝を検出。砂鉄の製練から鉄器製作までの全工程が判明、注目を集めた。『情報』31号。
- 9 カジヤ古墳 中郡峰山町杉谷、1972年2～3月、町教委調査。竹野川の左岸丘陵上にある。東西73m、南北55mの大円墳で、竪穴式石室1、木棺直葬3を確認。方格渦文鏡・筒形銅器・車輪石・石釧・鍬形石・鉄刀・鉄剣・工具が出土。墳丘は在地的だが、副葬品は畿内色が顕著。大和政権との関係が注目される。古墳前期(4世紀)。『町報告』1集、『情報』20号。府登録。





- 10 扇谷遺跡 おおぎだに 中郡峰山町丹波、1974・77・78年、1980年7～8月、1981年8月～9月、1982年3月、1982年7～9月、町教委調査。幅6m、深さ4m、硬い花崗岩をほりぬいた断面V字形の2重の環濠が丘陵を1kmにわたってめぐる集落。弥生前期（紀元前3世紀）。陶埴・玉・鉄斧・ガラスなどが出土、外来のハイテク集団を想起させる。『町報告』2・9・10・12集。
- 11 途中ヶ丘遺跡 とちゅうがおか 中郡峰山町長岡、1972・74・75・77・79・88・89・90年、町教委調査。竹野川の支流、鱒留川流域にある。幅2m、深さ1mの環濠が幾重にもめぐる大集落。弥生前期～後期（前3世紀～3世紀）。多量の弥生土器や玉・鉄・陶埴などが出土。短命の扇谷遺跡に対し弥生時代を通じて存続した拠点集落である。『町報告』3集。
- 12 古殿遺跡 ふどんの 中郡峰山町古殿、1977年4～5月、府教委調査。1982年7～10月、1986年8月～12月、センター調査。丘陵端にある集落。弥生後期（3世紀）～古墳中期（5世紀）、中世（12～13世紀）。弥生土器・土師器のほか、槽・桶・曲物・案・椀・匙・糸巻・人形・陽物形・刀子形などの木器が豊富。『府概報』1978、『報告』9冊、『木器集成図録』。
- 13 大田鼻横穴群 おおたがはな 中郡大宮町三坂帯城、1985年10月～1986年6月、府教委調査。竹野川右岸の丘陵南斜面にある。標高50～60m間に30基検出。古墳後期～奈良時代（6世紀後半～8世紀中葉）。京都府最大の横穴群で土器、耳環、鉄刀などが出土。「厨」「厨物」の墨書土器は、被葬者の性格を考える上で重要。『府概報』1987、史想22号。
- 14 正垣遺跡 しょうがき 中郡大宮町奥大野、1985年10月～1986年7月、センター調査。竹野川の支流常吉川左岸の台地上にある集落。弥生後期～鎌倉時代（3世紀～12世紀）の遺構が重複。奈良時代の墨書土器や平安時代の施釉陶器・輸入陶磁器、琴・下駄などの木製品、石帯が出土。官衛的色彩が強く注目される。『情報』20号、『概報』22冊、『考古学雑誌』72-4。
- 15 定山遺跡 じょうやま 与謝郡岩滝町弓木、1978年10・11月、1979年、町教委調査。阿蘇海に注ぐ野田川河口近くの台地上にある集落。縄文時代～平安時代（12世紀）。打製石斧・磨製石斧・石庖丁・石槍などの石器や桶・箸・人形・井戸杵などの木製品、烏帽子が出土。井戸杵材には、染色用版木が転用される。丹後ちりめんの源流か。『町報告』3・4集。
- 16 蛭子山1号墳 へびすやま 与謝郡加悦町明石、1929年10・11月・12月、府調査。1984年8～10月、1988年7～8月、町教委調査。丘陵の先端にある。全長145mの前方後円墳で、丹後で3位の規模。古墳前期（4世紀）。後円部に花崗岩製の舟形石棺ほか3基の主体部を併葬。内行花文鏡・刀・剣・勾玉など出土。『町報告』12・14冊、『町報告』4・8集。国史跡。
- 17 作山1号墳 つくりやま 与謝郡加悦町加悦、1929年10月、府調査。1989年2～12月、町教委調査。蛭子山古墳群の隣の丘陵にある全長36mの帆立貝式前方後円墳。古墳前期（4世紀）。組合式石棺から熟年男性の人骨、四獣鏡・石釧・玉類・鉄剣が出土。同丘陵には、ほかに前方後円墳1・方墳1・円墳1がある。『府報告』12・14冊、『町報告』5集。国史跡。
- 18 鳴谷東1号墳 しまたにひがし 与謝郡加悦町温江、1986年7～9月、1989年7～9月、立命館大学調査。野田川の支流温江川の奥にある。直径55m、高さ15mの円墳。古墳中期（5世紀）。完存する葺石・埴輪列は築造時の雄姿を彷彿させる。埴輪列11本毎に木製樹物の柱穴を確認。円筒・朝顔・家・蓋・短甲・草摺・盾などの埴輪が出土。『立命館大学報告』1・2冊。





19



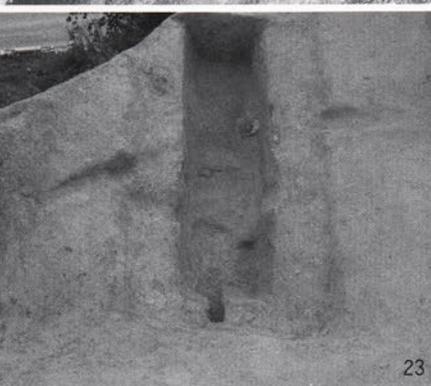
20



21



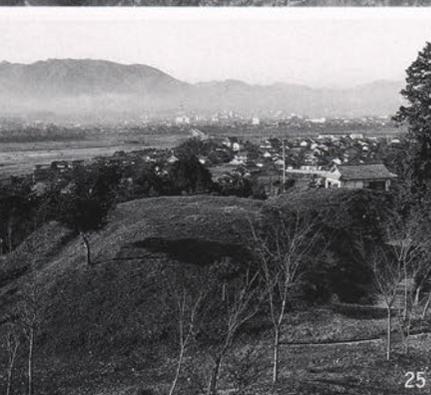
22



23



24



25



26



27

- 19 温江遺跡 あつえ 与謝郡加悦町温江、1988年10月～1989年2月、1989年5～7月、センター調査。野田川の支流である温江川によって形成された平野部にある。弥生中期(2世紀)～平安後期(12世紀)の集落。2m×1.5m、深さ1.8mの土坑から立ったままの梯子が出土。弥生後期の貯蔵穴の好例。『情報』33・34号、『概報』37冊。
- 20 志高遺跡 しだか 舞鶴市志高、1980～1984年、市教委調査。1984～1988年センター調査。由良川の自然堤防に広がる縄文早期(紀元前5000年)～近世(19世紀)の大複合遺跡。縄文早期～前期の土器群、弥生中期の貼石墓・玉作り、奈良～平安時代の建物群は、丹後地方の古代史研究の上で重要である。『市報告』4・6・7集、『報告』12冊。
- 21 三河宮の下遺跡 そうごみやのした 加佐郡大江町三河、1980年11月～1981年3月、府教委・センター調査。由良川左岸の自然堤防上にある縄文前期(紀元前3000年)～古墳後期(6世紀)の遺跡。縄文前期～後期の集落から土器・石器のほか、京都府では出土例の少ない球状耳飾や土偶が出土。『概報』2冊。
- 22 石本遺跡 いしもと 福知山市牧、1984年3月～9月、センター調査。由良川と牧川の合流点付近の沖積地にある縄文後期(紀元前2000年)～古墳後期(6世紀)の遺跡。弥生中期の方形周溝墓や古墳後期の竪穴住居を検出。黒漆塗りの木製鞍や刻骨(ササラ)は、京都府では初資料である。『報告』8冊。
- 23 広峯15号墳 ひろみね 福知山市天田、1986年4月～11月、1987年3月～11月、市教委調査。福知山盆地の南方丘陵上にある全長40mの前方後円墳。主体部から革製品・槍・鉄剣・鉄斧・鉞・管玉、「景初四年」銘盤龍鏡が出土。この鏡は、三角縁神獸鏡が舶載か仿製かの論議をよんだ。辰馬考古資料館に同範鏡がある。古墳前期(4世紀後半)。『市報告』16集、『謎の鏡』。重文。
- 24 ヌクモ2号墳 福知山市石原、1989年4～6月、センター調査。由良川左岸の丘陵上にある一辺10mの方墳で、箱形木棺(長さ4.3m)を検出。棺床に礫を敷く。盤龍鏡1、勾玉6、管玉52、白玉8、ガラス小玉15、竪櫛8が出土。盤龍鏡は後漢の作、光沢を放つ逸品である。古墳中期(5世紀)。1号墳からは剣・鉞が出土。『情報』33号、『概報』37冊。
- 25 稲葉山10号墳 いなばやま 福知山市猪崎、1958年に中川淳美・福知山史談会調査。由良川と土師川の合流地点北方丘陵上にある。10基からなる古墳群中にある全長38mの前方後円墳。古墳後期(6世紀前半)。礫床をもつ主体部で、鉄鏡・須恵器(杯・高杯・短頸壺・甕)が出土。円筒・朝顔・家・人物・馬など各種の埴輪をめぐらす。『丹波の古墳』1。
- 26 奉安塚古墳 ほうあんづか 福知山市報恩寺、1949年5月、福知山高等学校社会部調査。由良川に開く扇状地形の丘陵部にある。墳丘は不明。残存長4.2m×幅1.8mの無袖の横穴式石室の主体部から、蓋杯・高杯・甕・壺などの須恵器と鉄地金銅張の鏡・杏葉・辻金具・轡・鉄・鉄・刀が出土。鉄は稀有な例。古墳後期(6世紀末)。『福知山高校資料室収蔵品目録』。
- 27 大内城跡 おおち 福知山市大内、1981年5月～1982年7月、センター調査。土師川と竹田川の合流部付近の丘陵上にある。平安末期～鎌倉初期(12世紀後半)の館から鎌倉後期～室町(15世紀)の山城へと変貌。掘立柱建物・土塁・空堀・古墓等を検出。土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・銭貨・鏡・五輪塔などが出土。六人部荘々官の館か。『報告』3冊。



28



29



30

28 大道廃寺 だいどう 福知山市今安、1981年2～6月、センター調査。福知山市街地西方の丘陵にある。掘立柱建物4・古墓27・経塚1を検出。遺物には、土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・銅製経筒・竹製経筒・経巻・菊花双鳥文鏡・古銭・檜扇がある。経筒一括は府指定文化財。平安後期(12世紀)。『報告』1冊、『情報』8号。

29 小屋ヶ谷古墳 こやがたに 福知山市大内後正寺、1982年6月～12月、センター調査。土師川と竹田川の合流部東方の丘陵にある円墳(直径12m)。横穴式石室(残存長7.4m)から須恵器の蓋杯・提瓶・高杯・甃・壺、土師器の椀などの土器や鉄鏡・鉄鉢・鉄刀・鑿・鉸具などの鉄製品が出土。『概報』6冊。

30 三宅遺跡 みやけ 綾部市豊里町三宅、1987年5月～1988年3月、1988年4月～1989年1月、センター調査。由良川の支流である犀川の左岸にある。弥生中期～鎌倉後期(1～13世紀)。方形周溝墓・円墳・溝など多数。III・IV区では、古墳前期(4世紀)の520余基の土坑群を検出。「民衆の墓」か「粘土取り穴」か、2説が対立している。『概報』31冊、『情報』36号。

31 奥大石2号墳 おくおおいし 綾部市上杉町奥大石、1989年5月～9月、センター調査。八田川上流域の小盆地にある。内陸と日本海を結ぶルート上。一辺11mの方墳で、木棺を2基検出。蛇行鉄剣・刀子・鉄鏡・剣・針・堅櫛・白玉が出土。古墳中期(5世紀初頭)。蛇行鉄剣は全国で42例、京都府でははじめて。『情報』34号、『概報』37冊。

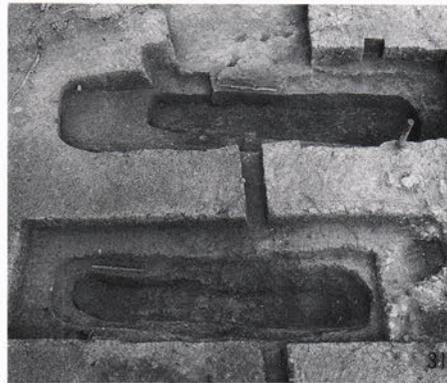
32 私市円山古墳 ささいちまるやま 綾部市私市町円山、1988年3～12月、センター調査。平野を広く見渡す丘陵上にある由良川流域最大の古墳。直径71mの円墳で、東側に造り出しがある。埴輪・葦石をもつ。木棺3基から冑・短甲・頸甲・肩甲・草摺・剣・鏡・胡録・鏡・玉類・農工具が出土。古墳中期(5世紀)の丹波の王墓。『概報』36冊。

33 野崎4号墳 のさき 綾部市高槻町野崎、1986年11月～1987年3月、センター調査。八田川上流域の小盆地にある。前方後円墳1・円墳5からなる。4号墳は直径7.5mの周溝のみ残存。家形埴輪1・須恵器壺1が出土。他の古墳からは、動物・鏡・土器を形づかった土製模造品が出土。小盆地内の首長墓か。『情報』24・25号。

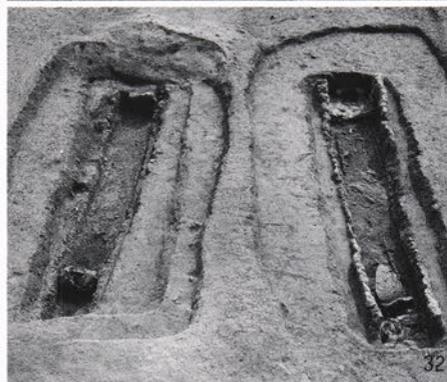
34 高谷3号墳 たかたに 綾部市館町高谷、1972年8月～9月、市教委調査。犀川中流域の左岸丘陵上にある。円墳10基からなる。直径18mの円墳で、当地最古の両袖の横穴式石室(全長9.8m)をもつ。馬鐸・管玉・ガラス小玉・刀・鋤先・鉸具・滑石製紡錘車・須恵器・土師器が出土。古墳後期(6世紀前半)。『市報告』1集。

35 平山城館跡 ひらやま 綾部市七石町、1986年11月～1987年3月・4～8月、センター調査。八田川上流域の小盆地に面した丘陵上にある。礎石建物・掘立柱建物と傾斜面に長さ35m・幅4m・傾斜角25°の断面V字形を呈した畝状堅堀を14条検出。防禦堅固な山城。室町後期(16世紀)に成立し、安土桃山(16世紀後半)に廃絶。『概報』24・31冊。

36 塩谷5号墳 しおだに 船井郡丹波町曾根、1989年5～9月、センター調査。曾根川下流域の右岸丘陵上にある。円墳12基からなる。5号墳は直径15.5m、高さ2mの円墳で、木棺から須恵器の蓋杯が出土。円筒埴輪のほか2体分の巫女形埴輪が出土。うち1体は全体が復原できる逸品。古墳後期(6世紀前半)。『情報』35号、『概報』38冊。



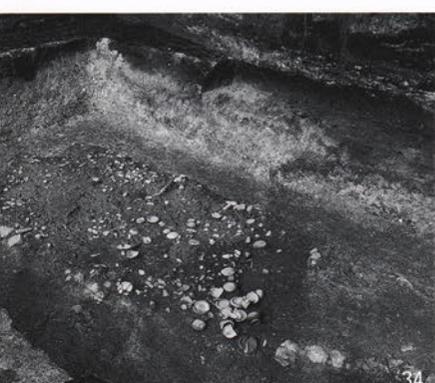
31



32



33



34



35



36



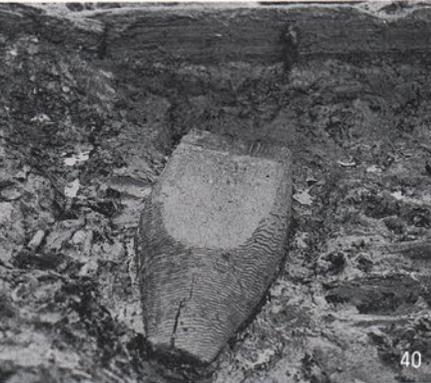
37



38



39



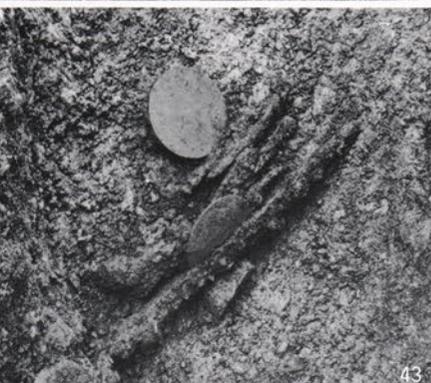
40



41



42



43



44



45

- 37 垣内古墳 かいち 船井郡園部町、1972年7月、町教委・同志社大学調査。園部盆地の北端の丘陵端にある全長82mの前方後円墳で、埴輪・葺石・段築をもつ。粘土槨から盤龍鏡・三角縁神獸鏡・三角縁仏獣鏡・画像獣帯鏡・勾玉・車輪石・石鈿・石製鎌・銅鎌・短甲・工具類が出土。古墳前期（4世紀）。丹波で見つかった畿内型前期古墳の典型。『町報告』1973。重文。
- 38 黒田古墳 くらだ 船井郡園部町黒田、1990年3～7月、町教委調査。園部川上流の丘陵端にある。全長52mの前方後円墳。後円部中央に、2つの埋葬施設がある。中心主体は人頭大の礫の上に木槨を置く。棺材の高野槨が残り、位至三公鏡や庄内式土器が出土。弥生末期の墳丘墓か、最古の古墳か。いま最も、注目されている。
- 39 千代川遺跡 ちよかわ 亀岡市千代川町、1980年～1990年、府教委・市教委・センター調査。縄文中期（前3000年）～室町（15世紀）の大複合遺跡。奈良・平安時代（8・9世紀）の丹波国府推定地。国府関係では掘立柱建物・柵・大溝などがあり、一画には桑寺廃寺もある。『府概報』1980-(1)・1981-(2)、『概報』2・14・17・21・26・31・35冊、『情報』9・12・18・23・31号。
- 40 北金岐遺跡 きたかなげ 亀岡市大井町北金岐、1983年7月～1984年3月、1984年11～12月、センター調査。大堰川右岸の台地上にある。縄文晩期～中世（紀元前4世紀～13世紀）の集落。丘陵の縁辺に点々と散らばった古代の散村の典型。樹皮で編みつつんだ壺や田舟が出土。『報告』5冊、『情報』11号。
- 41 太田遺跡 おおた 亀岡市稗田野町太田、1982年5～10月、センター調査。大堰川の支流である大飼川下流域に広がる弥生前期（紀元前2世紀）の二重環濠をもつ集落。水田・土墳墓も確認。壺・甕・鉢・高杯などの土器に混って朝鮮系無文土器も出土。木製品・石器も豊富で農耕開始期の技術水準の高さを証明。中世の遺構・遺物あり。『報告』6冊。
- 42 篠窯跡群 しの 亀岡市篠町、1976～1988年、府教委・センター調査。鶴川上流域の丘陵斜面にある。奈良（8世紀）～平安（11世紀）の約100基の窯跡群。登窯で須恵器、小型三角窯で緑釉陶器を焼成。ロストル構造の窯も検出。供給先は前半が丹波国府・中葉以降平安京へと広がった京都府最大の窯跡。『府概報』1977、『報告』2・11冊。
- 43 愛宕山古墳 あたごやま 北桑田郡京北町塔、1982年8～9月、町教委調査。周山盆地の北方丘陵端にある。一辺20mの方墳で、木棺から獣面鏡・獣形鏡・振文鏡・勾玉・管玉・ガラス小玉・琥珀製小玉・碧玉製棗玉・水晶製算盤玉・鉄剣・鉄鎌・鉄斧・鉋などが出土。府指定文化財。古墳中期（5世紀前半）。周山盆地の首長墓。『町報告』2集。
- 44 鳥羽遺跡 とば 京都市伏見区竹田小屋ノ内町、1963・75・76・78・81・82年、市埋文研調査。桂川と鴨川の合流部東方の平野部にある。鳥羽離宮下層の弥生後期～古墳後期（3～6世紀）の遺跡。竪穴住居・溝・土坑・木棺墓・土器棺墓・古墳周溝を検出し、土器・石器・木製品が出土。巫女形埴輪は稀有な例。『鳥羽離宮概報』1981～83、『平安京跡発掘資料選』(二)。
- 45 鳥羽離宮跡 とばりきゅう 京都市伏見区竹田桶ノ井町ほか、1960～69・72・90年、府教委・市埋文研調査。応徳3年（1086）に白河法皇造営。寝殿造りの建物・庭園・溝・井戸などを検出し、土器・瓦磚・漆器・仏像・土塔・木簡・飾金具が出土。常に一級資料を提供。一部国史跡。『鳥羽離宮調査概報』ほか多数。



46



47



48

46 西寺跡 さいじ 京都市南区唐橋西寺町 1959年以降、府教委・市埋文研調査多数。市立唐橋小学校付近。金堂・講堂・三面僧房・東西小子房・食堂院・中門・南大門を検出、寺域は8町に及ぶと判明。ヒノキの井籠組みの井戸は平安京で最大。中から「西寺」銘墨書土器や箸・独楽・人形・土馬など出土。『史跡西寺跡』、『市埋文研概報』1978-II、ほか多数。国史跡。

47 北野廃寺瓦窯 きたの 京都市北区下白梅町、1979・80年 市埋文研調査。北野廃寺寺域内で発見された窰窯5基・平窰2基・炭窰1基からなる瓦窰群。飛鳥時代から平安後期(7~12世紀)まで操業。奈良飛鳥寺の瓦窰とともに最古の境内瓦窰。『史料京都の歴史』2。

48 広隆寺 こうりゅうじ 京都市右京区太秦蜂岡町、1976・1977年平安博物館・市埋文研、1981年センター調査。センター調査では飛鳥時代の瓦や梵鐘の鋳型・フイゴ・銅鐸などが出土。平安中期(10世紀)の梵鐘鋳造遺構は一辺2.7m、深さ1.2mで穴の底に鋳型の土台を置いている。『概報』3・5冊。

49 栗栖野瓦窰跡 くるすの 京都市左京区岩倉幡枝町、1931・32・82・85年、府教委・市埋文研調査。総数40余基からなる瓦窰跡群で飛鳥時代から平安後期(7~12世紀)まで操業。4・6号窰では、平・丸瓦が窰詰め状態のまま出土。軒丸瓦・緑釉(瓦、鴟尾、陶器)・鬼瓦・須恵器が出土。木工寮所属の「栗栖野瓦屋」に比定。『市概要』1979。1934年国史跡指定。

50 蟹ヶ坂瓦窰跡 かにがさか 京都市北区西賀茂円峰、1983年11月~1984年4月、市埋文研調査。賀茂川右岸の丘陵斜面にある。4基の瓦専業窰とそれに伴う排水溝を検出。丸瓦・平瓦・軒丸瓦が出土。西賀茂一帯の中では最も古い(7世紀後半)。上出雲寺跡(上御霊神社境内)の瓦窰。『市概要』1983。

51 梅ヶ畑遺跡 うめがはた 京都市右京区梅ヶ畑向地町、1963年9月20日発見。京都から周山へ抜ける街道沿いの丘陵上にある。北へのびる尾根東側斜面で大小の袈裟摺文銅鐸4口を2対入れ子にした状態で発見。3号鐸の文様は大半が消失しており、鐸全面を線刻で再現する。京都府では最古型式の銅鐸群である。『京都の文化財』2集。府指定。

52 平安宮左兵衛府跡 へいあんきゅうさひょうえふ 京都市上京区下立売通日暮西入中村町、1987年2月、市埋文研調査。平安初期~中期(9~11世紀)の溝を検出。土師器・須恵器・施釉陶器・黒色土器・土製品・石製品・金属製品が出土。土師器杯の内面に仮名書きの和歌を墨書した土器は著名。『市埋文研概報集』1978-II。

53 平安宮豊楽殿跡 へいあんきゅうふらくでん 京都市中京区聚楽廻西町85、1987年10月~1988年1月、市埋文研調査。天皇即位儀式や節会・相撲に使用された豊楽院の正殿。延暦19年~康平6年(800~1063)までの263年間存続した。凝灰岩製の延石・地覆石・羽目石などの壇上積基壇化柱や緑釉鳳凰文鴟尾・緑釉軒丸瓦が出土。『市概報』1988。国史跡。

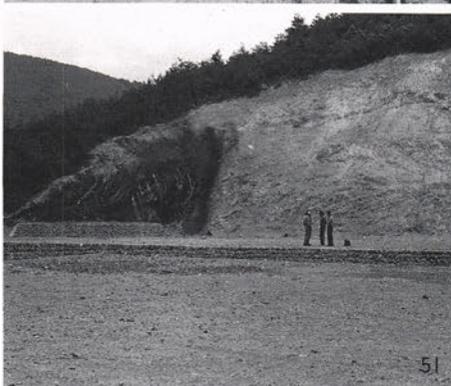
54 法住寺殿跡 ほうじゅうじどの 京都市東山区三十三間堂廻り、1978年5月~11月、平安博物館調査。永暦2年(1161)、後白河法皇の御所として造営、寿永2年(1183)、源義仲による法住寺合戦によって焼失。平安後期(12世紀)の甲冑・武器が出土。鎌形には雲龍文金銀象嵌を施し、響には鶴を象嵌する。『平安京跡研究調査報告』13輯。重文指定。



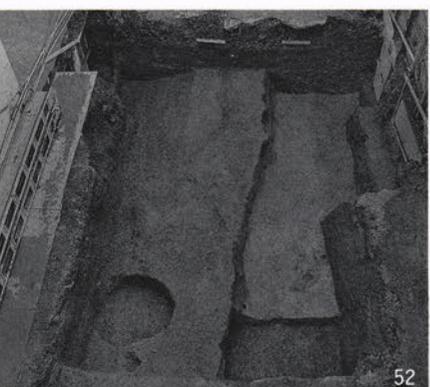
49



50



51



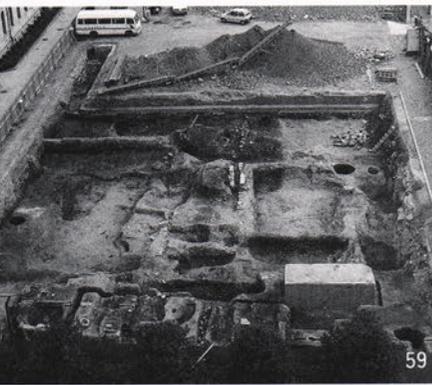
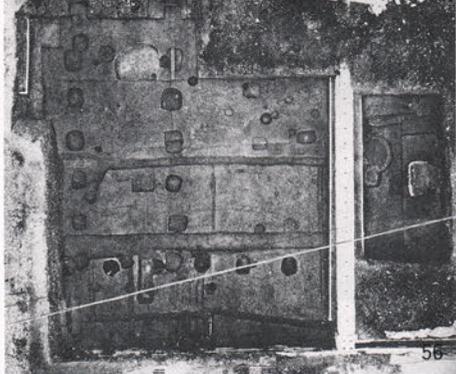
52



53



54



55 尊勝寺跡 そんしょうじ 京都市左京区岡崎西天王町、1959・72・76・77・79～81・84～87年、市埋文研、奈文研、六勝寺研究会、センター調査。康和4年(1102)創建。中門と金堂を結ぶ東回廊や堂・東塔などの主要建物を検出。センター調査では、東西10間、南北6間の観音堂を検出、多量の瓦が出土。『奈文研学報』10冊、『概報』23冊、ほか多数。

56 平安京跡右京一条三坊九町 へいあんきょううきょう 京都市北区大將軍坂田町山城高校敷地、1979年2～8月、1980年5～11月、府教委調査、1984年7～10月、1987年7～9月、センター調査。平安時代初期(8世紀末)の高級貴族の邸宅。主殿のまわりにコの字型に脇殿を配置。寝殿造の邸宅の原型。『府概報』1981-(1)、『概報』16・28冊。府史跡。

57 平安京跡右京六条一坊五町 へいあんきょううきょう 京都市下京区中堂寺南町、1987年8月～1988年3月、市埋文研調査。西鴻臚館南方に位置する平安前期(9世紀)の邸宅。コの字型配置の中心建物と周囲の附属建物の全容が判明。中心建物は廊下でつながれ、右京一条九坊三町邸より寝殿造に一步近づいている。『平安時代の平安京』

58 平安京内膳町跡 へいあんきょうないぜんちょう 京都市上京区烏丸通上長者町上龍前町ほか、1978年2月～1980年3月、府教委調査。古代平安京から中世を経て近世京都までの遺構・遺物を確認。10世紀から18世紀の多彩な土器群は、平安京の土器編年の基準資料。慶長年間の米割符関係木簡も貴重。『府概報』1980-(3)。

59 平安京跡左京近衛西洞院 へいあんきょうこのえにしのとういん 京都市上京区下立売通新町西入敷之内町、1988年1～8月、センター調査。近衛大路と西洞院大路の交差点の変遷が解明されるとともに、華南三彩などのおびただしい量の近世陶磁器類が出土、近世の上京の繁栄のようすがうかがわれる。『概報』33冊。

60 二帖半敷町遺跡 にちょうはんじきちょう 京都市下京区烏丸通綾小路下る二帖半敷町、1979年・80・81年、市埋文研調査。平安京左京五条三坊。江戸時代(17世紀前半)の井戸から、竹トンボ・人形・刷毛・巻物軸・小刀柄・下駄などの木製品が出土。紙工と木工細工の一括遺物。近世下京の秀れた職人技がうかがえる。『平安京跡発掘資料選』(二)、『史料京都の歴史』2

61 森本遺跡 もりもと 向日市森本町山開ほか、1970年、長岡京発掘調査団調査。1982年7～9月、センター調査。向日丘陵の北東端から沖積地にかけてある弥生集落。弥生中期～後期(2～3世紀)の水路や畦畔を検出。後期の水路から特殊壺形土器の体部に眉・目・鼻を表現した、いわゆる人面土器が出土。『調査団概報』、『概報』8冊、『情報』24号。

62 鶏冠井遺跡 かいで 向日市鶏冠井町十相のほか、1962・1981～86年、市・センター調査。標高12m前後の低地性遺跡。縄文晩期～中世(紀元前4～14世紀)までの集落。特に弥生前期から中期の土器、石器(石鏃・太型蛤刃石斧・石庖丁)、木製品(鋤・鎌・高杯)が多量に出土。京都では初の銅鐸鑄型が目される。『調査団』1965、『市報告』10集、『情報』18号。

63 物集女車塚古墳 もずめくるまづか 向日市物集女南条、1930年府調査、1983・84年市教委調査。向日丘陵東方の先端部に築かれた全長45mの前方後円墳。古墳後期(6世紀前半)。葺石・植輪をもち2段築成。横穴式石室(全長11.1m以上)の奥壁部に組合式家形石棺(1.8×0.9m)がある。土器・武器・馬具・装身具が出土。乙訓最後の前方後円墳。『市報告』23集。府史跡。





64



65



64 長岡京跡左京13次 ながおかきょうさきょう 向日市鶏冠井町沢の東、1977年6月～7月、市教委調査。左京二条二坊六町にあたる。宅地の中央の東西溝から、土器・瓦・木製品などとともに多量の木簡・墨書土器が出土。太政官や造営を示す木簡が多く、長岡京における木簡研究の出発点となった。『市報告』4集。

65 長岡京跡左京51次 ながおかきょうさきょう 向日市鶏冠井町沢の東、1980年5月～7月、市教委調査。左京二条二坊六町。東西溝から多量の木簡を中心とする各種の遺物が出土。左京13次・22次調査出土分とあわせ、木簡の研究から、この地が太政官厨家と推定。平安京に先立つ官外官衙（諸司厨町）の存在を実証した。『市報告』7集。

66 長岡京跡左京53次 ながおかきょうさきょう 長岡京市神足下八ノ坪、1980年6月～9月、市教委調査。左京六条二坊五・十二町・下八ノ坪遺跡・久我暇の調査であり、長岡京期（8世紀末）の掘立柱建物3棟、溝、平安時代の古道「久我暇」を検出。柱穴から八稜鏡が出土正倉院のものと同範。『市報告』14冊、『長岡京古文化論叢』163～173頁。

67 長岡京跡左京106次 ながおかきょうさきょう 向日市上植野町十ヶ坪、1983年12月～1984年3月、市教委調査。左京四条二坊六町にあたり、掘立柱建物5棟、道路側溝、井戸1基を検出。多くの土器とともに籠・人形・独楽などの木製品や銅鈴が出土。下層は、鴨田遺跡にあたり古墳前期～後期（4～6世紀）の土器が良好な状態で出土。『市報告』17集。

68 長岡京跡左京118次 ながおかきょうさきょう 向日市森本町小柳ほか、1984年10月～1985年2月、センター調査。左京一条二坊十・十一町。十町の宅地から掘立柱建物13棟以上・柵・縦板組みの井戸・溝・土坑・畑の畝・南一条条間大路の両側溝など検出。土器、和銅開珎・神功開寶の銅銭、「内膳・厨・楊」などの墨書土器、木製の印章などが出土。『概報』15冊。

69 長岡京跡左京120次 ながおかきょうさきょう 向日市上植野町池田、1984年12月～1985年3月、市教委調査。二条大路・東二坊坊間小路交差点を検出。長岡京期（8世紀末）の土師器・須恵器・瓦埴類・土馬・カマド・木簡・井戸枠・とりべなどが多量に出土。「政所」「給服所」の文字を書いた木簡・墨書土器は重要。『市報告』17・18集。

70 長岡京跡左京162次 ながおかきょうさきょう 向日市鶏冠井町小深田25 1986年10月～12月、市教委調査。左京二条二坊十五町、二条条間大路・東二坊大路交差点にあたる。道路側溝から多くの土器や木簡・瓦・ミニチュアカマド・土馬・墨書人面土器・鳴鐘・鉄鏡・鉄鏝・首を人為的に切断した獣骨が出土、まとまった祭祀遺物が注目される。『市報告』27集。

71 長岡京跡左京170次 ながおかきょうさきょう 向日市上植野町南淀井、1987年2～3月、市教委調査。左京四条二坊十一町・東二坊坊間小路推定地。東二坊坊間小路の両側溝・長岡京期の掘立柱建物・土坑・溝を検出。西側溝からは、金銅製の鏝子（錠）が出土。銅版を蠟接し、宝相華文の毛彫りと魚子を施した逸品。『市報告』21・24集。

72 雲宮遺跡 くもみや 長岡京市馬場六ノ坪 1960・78～80・82・84～90年、府教委・市教委・市埋文センター・センター調査。縄文晩期～古墳後期（前4世紀～6世紀）の複合集落。畿内の前期弥生土器の編年を確立した記念碑的遺跡。集落をとりまく前期の環濠を検出。縄文晩期（前4世紀）の土偶は山城唯一。『市報告』5・14、『市埋文報告』57～63年度。



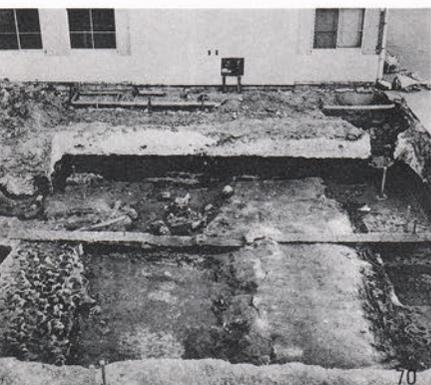
67



68



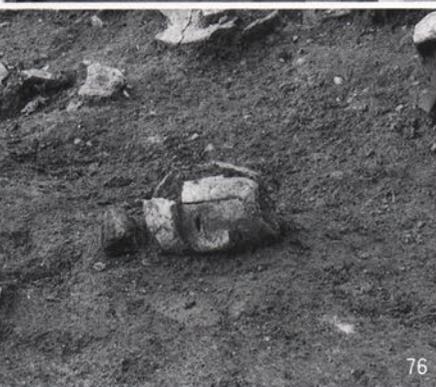
69



70



72



73 神足遺跡 こうたり 長岡京市神足、1978・79・81・82・84・85・86・89年、市教委、市センター調査。小畑川右岸の段丘上にある縄文後期（紀元前2000年）から近世の複合遺跡。弥生中期～後期（紀元前後から3世紀）の竪穴住居・方形周溝墓・土壇墓・溝・壺棺墓を検出。乙訓の代表的な弥生村。『市報告』3・5冊、『市埋文報告』4集。

74 棚次遺跡 たなつぎ 長岡京市神足棚次、1979・80・82・83年、市教委調査。桂川右岸の低地にある弥生後期から鎌倉時代（3～13世紀末）の遺跡。平安中期（11世紀）の水田では、人や牛の足あとと畦畔が確認されており、当時の水田経営を考える上で重要。『市埋文年報』昭和57・58年度、『市報告』14冊。

75 恵解山古墳 いげのやま 長岡京市勝龍寺、1975～77・80年、市教委調査。桂川・宇治川・木津川の合流点を間近にひかえる低地にある。乙訓地方最大の前方後円墳（全長120m）。後円部には竪穴式石室が想定される。前方部の副葬品埋納施設から直刀・長剣・槍・短刀・鉄鎌・刀子など700点以上の鉄器が出土。古墳中期（5世紀前半）。『市報告』8冊。国史跡。



76 舞塚1号墳 まいづか 長岡京市今里、1982年7月～1983年1月、センター調査。小畑川右岸の微高地にある造り出し付き円墳（全長40m）。後世の削平を受け墳丘は残存しない。周溝部のみ確認。土師器、須恵器、円筒・朝顔・形象埴輪が出土。人物埴輪は乙訓ではこれだけ。古墳後期（6世紀前半）。『概報』8・9冊。

77 塚本古墳 つかもと 長岡京市開田、1982年7～9月、1984年8～9月、市センター調査。1987年6～7月、センター調査。長岡京跡の五条大路下層で検出した前方後円墳（全長32m）。周溝から円筒や各種の形象埴輪が出土。古墳後期（6世紀前半）。五条大路は、古墳を避けてつくっている。『市埋文報告』1集、『市埋文年報』昭和59年度、『概報』27冊。

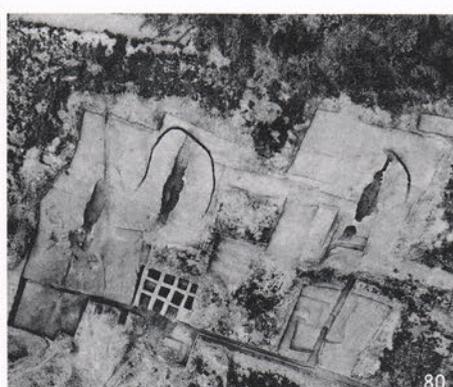
78 長岡京跡右京310次 ながおかきょううきょう 長岡京市今里更ノ町ほか、1988年7月～1989年3月、センター調査。長岡京右京二条二坊十四・十五町及び西二坊大路・二条条間大路推定地。西二坊大路東側溝・掘立柱建物・井戸などを検出。井戸は井籠組みで敷石をとまなう立派なもの。「流入」移送のための召喚状の木簡など、木簡多数。『情報』33号。



79 山城国府跡 やましろこくふ 乙訓郡大山崎町円明寺ほか、1979～90年、町教委・センター調査。基壇建物、掘立柱建物・柵・井戸・溝・土坑などの遺構から土師器・須恵器・瓦器・彩釉陶器・輸入陶磁器・瓦塼・木器・金銅製品・銭貨などが出土。平安時代の繁栄のようすが示すが、山崎津・山崎駅・難宮・国府の位置はまだはっきりしない。『町報告』2・3集。

80 隼上り瓦窯跡 はやあがり 宇治市菟道東隼上りほか、1982年1～3月・4～12月、市教委調査。宇治川東岸の丘陵南斜面にある4基からなる飛鳥時代（7世紀）の瓦陶兼業窯。製品は奈良県の飛鳥の「豊浦寺」へ供給された。須恵器・硯も多数出土。『市概報』3集、『史跡隼上り瓦窯跡』。『考古学雑誌』73-2。国史跡。

81 庵寺山古墳 あんでらやま 宇治市広野町丸山、1975年7月～8月、1989年7～10月、市教委調査。丘陵上にある直径56mの円墳で、周濠をめぐる。粘土椀の大半は攪乱を受けている。墳頂部から鱗付円筒埴輪群や家・蓋・甲冑・靱形埴輪が出土。古墳前期（4世紀後半）。『庵寺山古墳周障調査の記録』1976、『市概報』15集、『史林』71-2。





82



83



84

82 瓦塚古墳 かわらづか 宇治市五ヶ庄瓦塚、1987年8～10月、市教委調査。  
宇治川右岸の標高20m前後の台地にある。直径30mの円墳で葦石と埴輪列をもつ。礫層と木棺直葬の2基の主体部が上下に重複しており、棺金具・鉄鏃・刀子・ガラス玉・管玉・玉杖形金銅製品などが出土。玉杖形金銅製品は朝鮮半島製。古墳中期（5世紀後半）。『市概報』11集。

83 森山遺跡 もりやま 城陽市富野森山、1976年2～6月、1982年7～8月市教委調査。木津川右岸の標高35mの丘陵上にある縄文中期から古墳前期（紀元前2000年～4世紀）にかけての集落。縄文後期の集落の全容が判明したのは、京都府ではここだけ。弥生後期の高地性集落、古墳前期の巨大な方形周溝も重要。『市報告』6集。国史跡。

84 芝ヶ原遺跡 しばがはら 城陽市久世芝ヶ原、1972・77・78・81・82・83・84年、市教委調査。標高44mの台地にある弥生後期～飛鳥時代（3～7世紀）の遺跡。芝ヶ原古墳群と重なりあう。古墳中期（5世紀）の低墳丘方形墓・埴輪棺・木棺、古墳後期（6世紀）の竪穴住居・掘立柱建物など多数検出。古墳後期の拠点集落。『市報告』1・7・8・11・12・13・14集ほか。

85 正道遺跡 しょうどう 城陽市寺田正道、1973・1976～1990年、市教委調査。芝ヶ原遺跡の南側の台地上にある。古墳後期の竪穴住居・低墳丘方形墓・木棺墓・掘立柱建物、奈良時代の掘立柱建物を検出。2間×6間に四面庇の付く大型建物を中心とする建物群を確認。官衙遺跡（久世郡衙）か。『市報告』1・6～9・11・13～15・17・19・20集。国史跡。

86 芝ヶ原古墳 しばがはら 城陽市寺田大谷、1986年6～8月、市教委調査。標高50mの丘陵にある全長21mの前方後方墳。古墳前期初頭（3世紀）。墳頂部の礫層から庄内式土器、棺内から四獣形鏡・銅釧・玉・鉄器が出土。土器と鏡の年代観が一致せず築造時期をめぐって論議がわいた。最古級の古墳として貴重。『市報告』16集。国史跡。重文。

87 車塚古墳 くるまづか 城陽市平川車塚ほか、1894年石棺出土。1915年、府調査。1975～86・88年、市教委調査。二重周濠をもつ全長183mの前方後円墳。墳丘は3段築成、埴輪・葦石をもつ。長持形石棺から銅鏡7、玉類5000、石製刀子・合子・刀剣、甲冑などが大量に出土。古墳中期（5世紀前半）の山城最大の王墓。『久津川古墳研究』、『市報告』多数。国史跡。

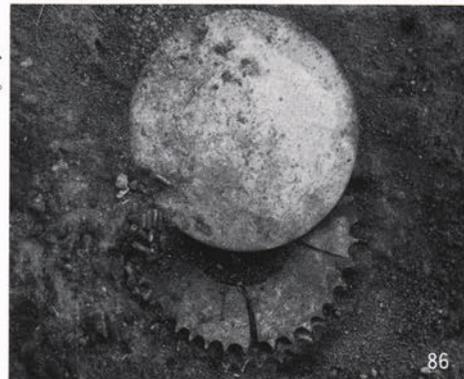
88 丸塚古墳 まるづか 城陽市平川鍛冶塚、1985年1～2月・7～12月、1986年7～12月、市教委調査。車塚古墳の東にある全長80mの帆立貝式前方後円墳で埴輪・葦石・周濠をもつ。墳丘は3段築成。出土した家形埴輪は、復原総高1mに及ぶ立派なもので、「王」の居館を連想させる。古墳中期（5世紀前半）、車塚に先行する。『市報告』15・17・19集。国史跡。

89 赤塚古墳 あかつか 城陽市平川古宮、1973・74・80・82年、市教委調査。平川廃寺の西側にある2段築成の円墳（直径22.5m）。造り出しをもち、箱形木棺・埴輪円筒棺などの小型埋葬施設を段築の埴輪列中で確認。挂甲・直刀・鏃・鎌・刀子・白玉・須恵器・埴輪（円・器財・家・動物・人物）が出土。古墳中期（5世紀後半）。『市報告』3・12集。

90 青山1号墳 かぶとやま 城陽市観音堂青畑、1966年5月、府教委調査。丘陵上にある全長25mの前方後円墳。円筒・家・蓋・靴・鶏・動物・人物などの埴輪をともしやう。片袖の横穴式石室から馬具・刀・鎌・鏃・碧玉製管玉・ガラス小玉・須恵器が出土。古墳後期（6世紀前半）の首長墓である。円墳の2号墳は一代前の首長墓。『府概報』1967、『史想』13号。



85



86



87



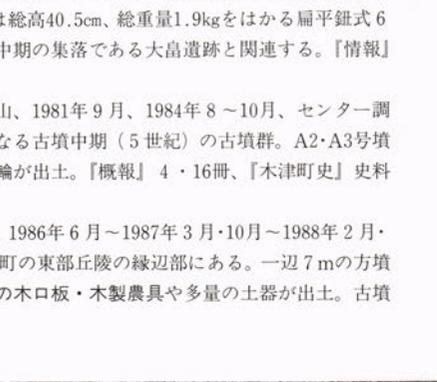
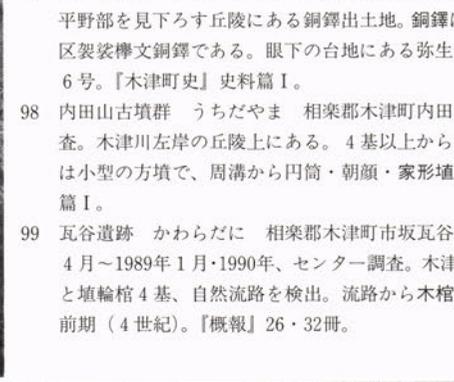
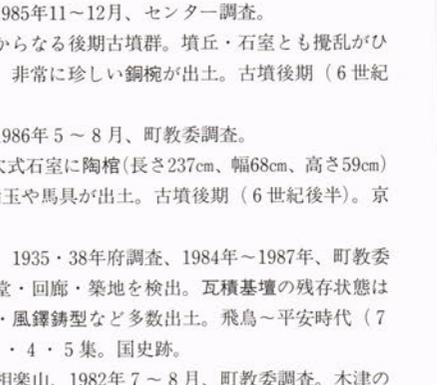
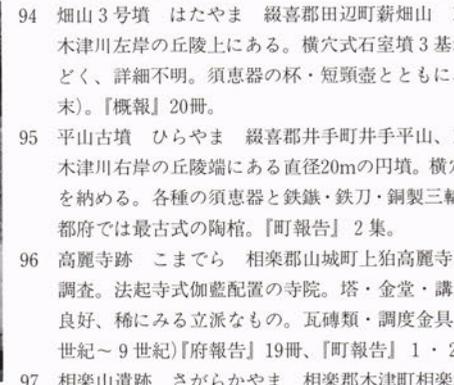
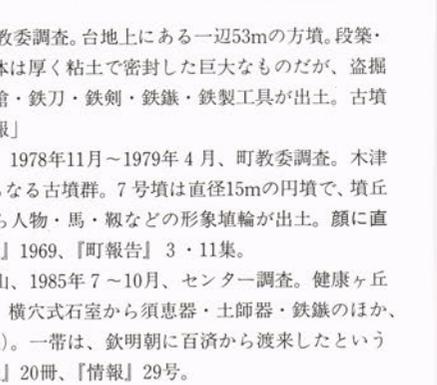
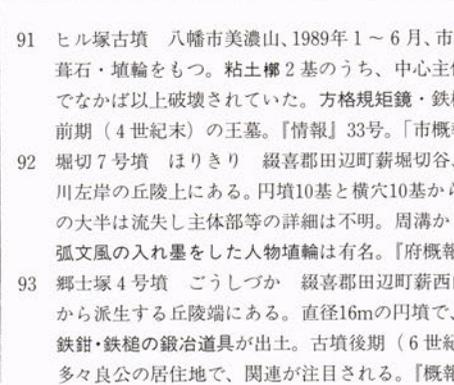
88



89



90



91 ヒル塚古墳 八幡市美濃山、1989年1～6月、市教委調査。台地上にある一辺53mの方墳。段築・葺石・埴輪をもつ。粘土槨2基のうち、中心主体は厚く粘土で密封した巨大なものだが、盗掘でなかば以上破壊されていた。方格規矩鏡・鉄槨・鉄刀・鉄剣・鉄鏃・鉄製工具が出土。古墳前期（4世紀末）の王墓。『情報』33号。『市概報』

92 堀切7号墳 ほりきり 綴喜郡田辺町薪堀切谷、1978年11月～1979年4月、町教委調査。木津川左岸の丘陵上にある。円墳10基と横穴3基からなる古墳群。7号墳は直径15mの円墳で、墳丘の大半は流失し主体部等の詳細は不明。周溝から人物・馬・鞍などの形象埴輪が出土。顔に直弧文風の入れ墨をした人物埴輪は有名。『府概報』1969、『町報告』3・11集。

93 郷土塚4号墳 ごうしづか 綴喜郡田辺町薪西山、1985年7～10月、センター調査。健康ヶ丘から派生する丘陵端にある。直径16mの円墳で、横穴式石室から須恵器・土師器・鉄鏃のほか、鉄鉗・鉄槌の鍛冶道具が出土。古墳後期（6世紀）。一帯は、欽明朝に百済から渡来したという多々良公の居住地で、関連が注目される。『概報』20冊、『情報』29号。

94 畑山3号墳 はたやま 綴喜郡田辺町薪畑山 1985年11～12月、センター調査。木津川左岸の丘陵上にある。横穴式石室墳3基からなる後期古墳群。墳丘・石室とも攪乱がひどく、詳細不明。須恵器の杯・短頸壺とともに、非常に珍しい銅椀が出土。古墳後期（6世紀末）。『概報』20冊。

95 平山古墳 ひらやま 綴喜郡井手町井手平山、1986年5～8月、町教委調査。木津川右岸の丘陵端にある直径20mの円墳。横穴式石室に陶棺（長さ237cm、幅68cm、高さ59cm）を納める。各種の須恵器と鉄鏃・鉄刀・銅製三輪玉や馬具が出土。古墳後期（6世紀後半）。京都府では最古式の陶棺。『町報告』2集。

96 高麗寺跡 こまでら 相楽郡山城町上狛高麗寺、1935・38年府調査、1984年～1987年、町教委調査。法起寺式伽藍配置の寺院。塔・金堂・講堂・回廊・築地を検出。瓦積基壇の残存状態は良好、稀にみる立派なもの。瓦磚類・調度金具・風鐸鏤型など多数出土。飛鳥～平安時代（7世紀～9世紀）『府報告』19冊、『町報告』1・2・4・5集。国史跡。

97 相楽山遺跡 さがらかやま 相楽郡木津町相楽相楽山、1982年7～8月、町教委調査。木津の平野部を見下ろす丘陵にある銅鐸出土地。銅鐸は総高40.5cm、総重量1.9kgをはかる扁平鈕式6区袈裟文銅鐸である。眼下の台地にある弥生中期の集落である大畠遺跡と関連する。『情報』6号。『木津町史』史料篇Ⅰ。

98 内田山古墳群 うちだやま 相楽郡木津町内田山、1981年9月、1984年8～10月、センター調査。木津川左岸の丘陵上にある。4基以上からなる古墳中期（5世紀）の古墳群。A2・A3号墳は小型の方墳で、周溝から円筒・朝顔・家形埴輪が出土。『概報』4・16冊、『木津町史』史料篇Ⅰ。

99 瓦谷遺跡 かわらだに 相楽郡木津町市坂瓦谷、1986年6月～1987年3月・10月～1988年2月・4月～1989年1月・1990年、センター調査。木津町の東部丘陵の縁辺部にある。一辺7mの方墳と埴輪棺4基、自然流路を検出。流路から木棺の木口板・木製農具や多量の土器が出土。古墳前期（4世紀）。『概報』26・32冊。

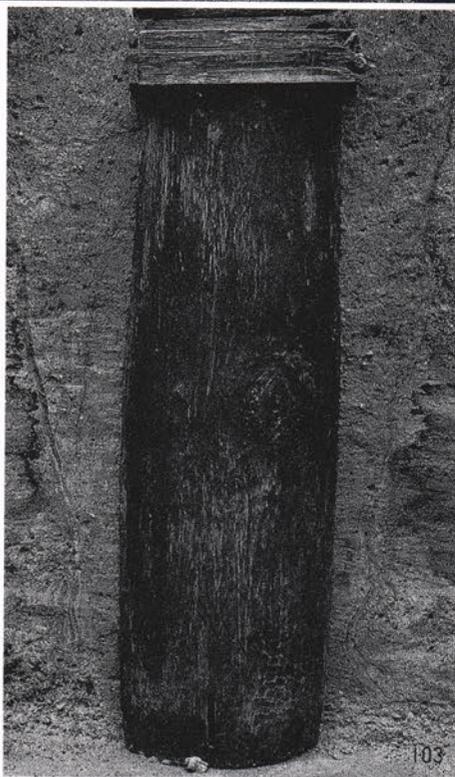


100



10

- 100 上人ヶ平埴輪窯 しょうにんがひら 相楽郡木津町市坂上人ヶ平、1988年12月～1989年3月、センター調査。木津町の東南部、丘陵の緩斜面にある。発掘した1号窯は、地下式無段・無階の埴輪専業窯で、円筒・家・盾・靱・馬・鶏・蓋などの埴輪が出土。上人ヶ平古墳群で使った。古墳中期～後期（5～6世紀）。『情報』32号、『概報』35冊。
- 101 上人ヶ平古墳群 しょうにんがひら 相楽郡木津町市坂上人ヶ平、1938年、府調査、1984～90年、センター調査。円墳2・低墳丘方形墓12からなる古墳中期～後期（5～6世紀）の古墳群。初期須恵器や鉄製農具を副葬し、円筒や各種の形象埴輪が出土。埴輪窯と古墳群の関係を説明。『府報告』20冊、『概報』17・21・26・32・35冊、『情報』23・24・27・28・32号。
- 102 上人ヶ平遺跡 しょうにんがひら 相楽郡木津町市坂上人ヶ平、1984～90年、センター調査。上人ヶ平古墳群と同じ台地に造営された奈良時代（8世紀）の官営瓦工房。平城宮大膳職の瓦を焼いた市坂瓦窯にともなう。大型建物(26×11m)4棟と小建物6棟を検出。粘土の採集から瓦の焼成までの全工程を復原。『概報』17・21・26・32・35冊、『情報』23・24・27・28・32号。
- 103 畑ノ前遺跡 はたのまえ 相楽郡精華町植田畑ノ前、1984年6～11月、1985年4月～1986年2月、町教委・古代学協会調査。弥生中期の集落、古墳後期の横穴式石室の古墳群、奈良時代の邸宅を検出。建物は23棟、井戸は全長3mを越える巨大なくり抜き井戸、一帯を勢力基盤にした稲峰間氏の邸宅と考えられる。『精華ニュータウン報告書』。
- 104 恭仁宮跡 くにきゅう 相楽郡加茂町例幣中切ほか、1975～90年、府教委・町教委調査。聖武天皇、天平12年(740)から4年間の短命の都。のち山背国分寺となる。15年間に及ぶ調査によって朝堂院域・内裏域・内裏東方推定官衙域の掘立柱建物群の存在を確認。平城宮式の軒丸瓦・軒平瓦が出土。府概報1974に関連文献掲載。『府概報』1975～1990。一部国史跡。



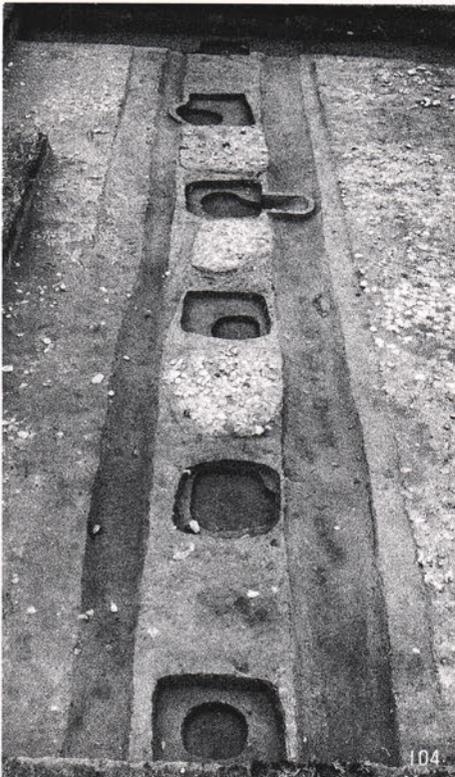
103

文献省略

- 報 告 『京都府遺跡調査報告書』  
 概 報 『京都府遺跡調査概報』  
 情 報 『京都府埋蔵文化財情報』  
 府 報 告 『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』  
 府 概 報 『埋蔵文化財発掘調査概報』  
 市 町 報 告 『〇〇市町埋蔵文化財発掘調査報告書』  
 市 町 概 報 『〇〇市町埋蔵文化財発掘調査概報』



102



104

# 掲載遺物リスト

遺跡名欄の天明朝体数字は前掲主要遺跡の番号 ◎重要文化財 ㊦京都府指定・登録文化財

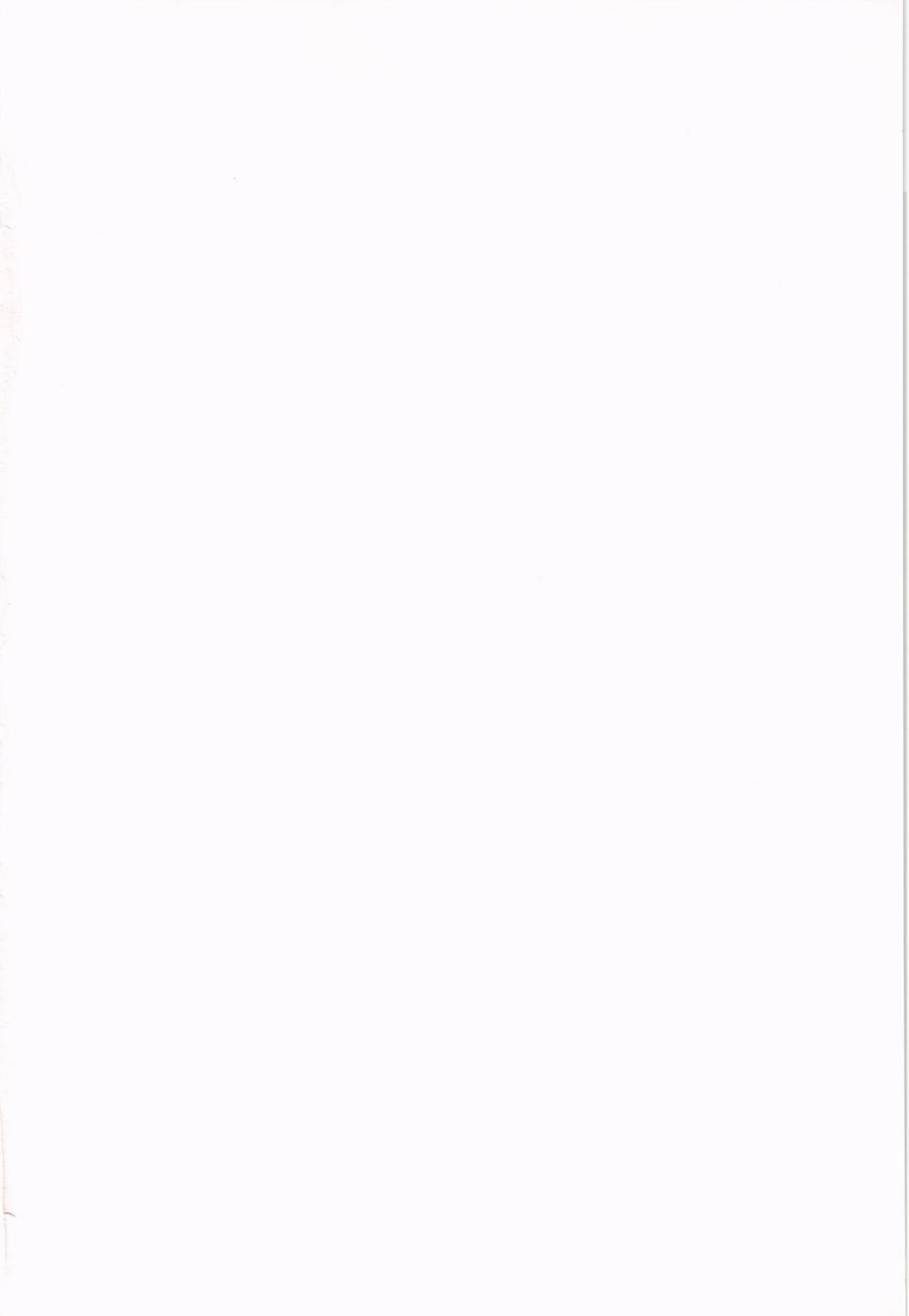
番号	遺物名	点数	遺跡名	時代	所蔵・保管者
1	埴輪男子	1	田辺町堀切7号墳	92 6世紀	田辺町教育委員会
2	土偶	1	長岡京市雲宮遺跡	72 縄文晩期	長岡京市埋蔵文化財センター
3	土面	1	加悦町有熊遺跡	縄文時代	加悦町教育委員会
4	土偶	1	大江町三河宮の下遺跡	21 縄文後期	京都府立丹後郷土資料館
5	人面土器	1	向日市森本遺跡	61 1・2世紀	京都府立山城郷土資料館
6	埴輪巫女	1	京都市伏見区烏羽遺跡	44 6世紀	京都市考古資料館
7	埴輪武人	1	城陽市赤塚古墳	89 5世紀	城陽市教育委員会
8	埴輪男子	1	城陽市青山1号墳	90 6世紀	京都府立山城郷土資料館
9	埴輪男子	1	長岡京市舞塚1号墳	76 6世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
10	埴輪巫女	1	丹波町塩谷5号墳	36 6世紀	〃
11~13	人形	3	向日市長岡京跡左京51次(二条二坊六町)	65 8世紀	向日市教育委員会
14	鬼瓦に描かれた人物	1	京都市北区北野廃寺瓦窯跡	47 〃	京都市考古資料館
15	人面墨描土器	1	向日市長岡京跡左京162次(二条二坊十四・十五町)	70 〃	向日市教育委員会
16	人形	1	京都市下京区二帖半敷町遺跡	60 17世紀	京都市考古資料館
17	伏見人形福助	1	京都市上京区烏丸上長者町上ル(内膳町遺跡)	58 18世紀	京都府教育委員会
18	◎双龍環頭大刀	1	久美浜町湯舟坂2号墳	1 6世紀	久美浜町教育委員会
19	木製鍬	1	木津町瓦谷遺跡	99 4世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
20	長持形石棺(レプリカ)	1	城陽市車塚古墳	87 5世紀	京都府立山城郷土資料館
21	陶棺	1	井手町平山古墳	95 6世紀	井手町教育委員会
22・23	埴輪軀・水鳥	2	加悦町鴨谷東1号墳	18 5世紀	立命館大学
24	短甲形埴輪	1	加悦町蛭子山1号墳	16 4世紀	加悦町教育委員会
25	埴輪蓋	1	木津町上人ヶ平14号墳	101 5世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
26	埴輪盾	1	長岡京市塚本古墳	77 6世紀	長岡京市埋蔵文化財センター
27	埴輪武人	1	城陽市赤塚古墳	89 5世紀	城陽市教育委員会
28	◎四獣形鏡	1	城陽市芝ヶ原古墳	86 3世紀	〃
29	◎貝輪形銅釧	1	〃	86 〃	〃
30	◎土器片	一括	〃	86 〃	〃
31	◎玉類	一括	〃	86 〃	〃
32	◎石釧	1	園部町垣内古墳	37 4世紀	園部町教育委員会
33	◎車輪石	1	〃	37 〃	〃
34	◎石釧	1	〃	37 〃	〃
35	㊦鍬形石	1	峰山町カジヤ古墳	9 〃	峰山町教育委員会
36	㊦獣面鏡	1	京北町愛宕山古墳	43 5世紀	京北町教育委員会
37	㊦方格渦文鏡	1	峰山町カジヤ古墳	9 4世紀	峰山町教育委員会
38	◎三角縁仏獣鏡	1	園部町垣内古墳	37 〃	園部町教育委員会
39	◎四獣形鏡	1	〃	37 〃	〃
40	◎三角縁神獣鏡	1	〃	37 〃	〃
41	◎画像獣帯鏡	1	〃	37 〃	〃
42	位至三公鏡	1	園部町黒田古墳	38 3世紀	園部町教育委員会

番号	遺物名	点数	遺跡名	時代	所蔵・保管者
43	方格規矩鏡	1	八幡市ヒル塚古墳	91 4世紀	八幡市教育委員会
44	画文帯神獸鏡	1	弥栄町太田南2号墳	7 "	弥栄町教育委員会
45	龍虎鏡	1	福知山市ヌクモ2号墳	24 5世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
46	◎景初四年銘鏡	1	福知山市広峯15号墳	23 4世紀	福知山市教育委員会
47	環頭大刀柄頭	1	丹後町高山12号墳	6 7世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
48・49	玉杖形金銅製品	2	宇治市瓦塚古墳	82 5世紀	宇治市教育委員会
50	玉類	一括	"	82 "	"
51	机	1	峰山町古殿遺跡	12 4世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
52	和歌を書いた土師器	1	京都市上京区下立売通智恵光院 東入(平安宮左兵衛府)	52 10世紀	京都市考古資料館
53	円面硯	1	宇治市隼上り瓦窯跡	80 7世紀	宇治市教育委員会
54	風字硯	1	亀岡市篠窯跡	42 9世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
55	水滴	1	向日市長岡京跡左京120次(二条 二坊五町)	69 8世紀	向日市教育委員会
56	木簡	1	長岡京市長岡京跡右京310次(西 二坊大路)	78 "	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
57～ 59・61	"	3	向日市長岡京跡左京13次・51次 (二条二坊六町)	64・65 "	向日市教育委員会
60	"	1	向日市長岡京跡左京2次(三条 二坊四町)	"	京都府立山城郷土資料館
62	"	1	京都市上京区烏丸通上長者町上 ル(内膳町遺跡)	58 17世紀	"
63	"	1	京都市南区御土居跡	17世紀	京都市考古資料館
64	緑釉軒丸瓦	1	京都市中京区聚楽廻西町(平安 宮豊楽殿)	53 9世紀	"
65・66	軒瓦一組	2	加茂町恭仁宮跡	104 8世紀	京都府教育委員会
67	八稜鏡	1	長岡京市長岡京跡左京53次(六 条二坊五町)	66 8世紀	長岡京市教育委員会
68	鳳凰文鴝尾	1	京都市中京区聚楽廻西町(平安 宮豊楽殿)	53 9世紀	京都市考古資料館
69	染色用版木	1	岩滝町定山遺跡	15 12世紀	岩滝町教育委員会
70・71	鍛冶道具	3	田辺町郷土塚4号墳	93 6世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
72・73	埴輪円筒・馬	2	木津町上人ヶ平古墳群	100 "	"
74～76	須恵器	3	亀岡市篠西長尾5号窯跡	42 10世紀	"
77～79	緑釉陶器	3	亀岡市篠黒岩1号窯跡	42 "	京都府教育委員会
80	軒丸瓦	1	宇治市隼上り瓦窯跡	80 7世紀	宇治市教育委員会
81	鬼面文鬼瓦	1	木津町上人ヶ平遺跡	102 8世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
82	銅鐸鑄型	1	向日市鶏冠井遺跡	62 前2・3世紀	向日市教育委員会
83	☐銅鐸	1	京都市梅ヶ畑遺跡	51 "	京都府立総合資料館
84・85	風鐸鑄型	2	山城町高麗寺跡	96 8世紀	山城町教育委員会
86・90	有樋式石剣	2	舞鶴市志高遺跡	20 2世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
87	石剣	1	長岡京市神足遺跡	73 1世紀	長岡京市教育委員会
88	有樋式石剣	1	宮津市日置遺跡	"	京都府立宮津高等学校

番号	遺物名	点数	遺跡名	時代	所蔵・保管者
89	石剣	1	亀岡市太田遺跡	41 前2世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
91	蛇行剣	1	綾部市奥大石2号墳	31 5世紀	〃
92・93	剣・鉾	2	福知山市ヌクモ1号墳	24 〃	〃
94~97	鉄鎌	4	長岡京市恵解山古墳	75 〃	長岡京市教育委員会
98~113	◎石製鎌	16	園部町垣内古墳	37 4世紀	園部町教育委員会
114~116	金銅胡籙金具	3	綾部市円山古墳	32 5世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
117~119	冑と甲	3	綾部市円山古墳	32 5世紀	〃
120・121	㊦馬具金銅杏葉	2	福知山市奉安塚古墳	26 6世紀	福知山高等学校
122	㊦馬具金銅辻金具	1	〃	26 〃	〃
123	馬具轡	1	福知山市小屋ヶ谷古墳	29 〃	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
124・125	馬具鉸具・鞍金具	2	丹後町高山古墳群	6 〃	〃
126	馬具木製鞍	1	福知山市石本遺跡	22 〃	〃
127	◎冑の鍬形	1	京都市東山区法住寺殿跡	54 12世紀	木下美術館
128	◎馬具轡	1	〃	54 〃	〃
129	将棋駒	1	京都市南区御土居跡	17世紀	京都市考古資料館
130	陶製将棋駒	1	宇治市隼上り遺跡	80 18世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
131・132	羽子板と独楽	2	京都市上京区烏丸通上長者町上ル (内膳町遺跡)	58 17世紀	京都府立山城郷土資料館
133	竹とんぼ	1	京都市下京区二帖半敷町遺跡	60 〃	京都市考古資料館
134	独楽	1	京都市伏見区烏羽離宮跡	45 12世紀	〃
135	〃	1	向日市長岡京跡左京106次(四条 二坊六町)	67 8世紀	向日市教育委員会
136	〃	1	京都市南区西寺跡	46 9世紀	京都市考古資料館
137~139	木球	3	京都市上京区烏丸通上長者町上ル (内膳町遺跡)	58 17世紀	京都府立山城郷土資料館
140	毬杖	1	京都市伏見区久我東町遺跡	18世紀	京都市考古資料館
141	羽子板	1	京都市中京区烏丸御池	16世紀	京都文化博物館
142	将棋駒	1	京都市下京区猪隈殿跡	〃	京都市考古資料館
143	将棋駒	2	京都市南区御土居跡	17世紀	京都市考古資料館
144~147	泥面子・碁石・サイコロ	4	京都市上京区下立売新町(府庁)	59 18世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
148・149	碁石	3	向日市長岡京跡左京51・89次(二 条二坊六町)	65 8世紀	向日市教育委員会
150~158	泥面子	8	京都市上京区下立売新町(府庁)	59 18世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
159	土製品猪	1	田辺町小田垣内遺跡	16世紀	〃
160	土製品犬	1	京都市上京区烏丸通出水	〃	京都市
161・162	伏見人形牛・大黒	2	京都市上京区下立売新町西入 (府庁)	59 18世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
163・164	伏見人形母子・天神	2	京都市上京区烏丸通寺ノ内下ル	〃	京都市
165	銅鐸	1	木津町相楽山遺跡	97 1・2世紀	木津町教育委員会
166	銅鈴	1	向日市長岡京跡左京106次(四条 二坊六町)	67 8世紀	向日市教育委員会
167	金銅鈴	1	京都市伏見区烏羽離宮跡	45 12世紀	京都市考古資料館

番号	遺物名	点数	遺跡名	時代	所蔵・保管者
168	銅磬	1	京都市下京区本圀寺跡	16世紀	京都市考古資料館
169	回銅鐸	1	京都市右京区梅ヶ畑遺跡	51 前3・2世紀	京都府立総合資料館
170	馬鐸	1	綾部市高谷3号墳	34 6世紀	綾部市教育委員会
171	風鐸	1	加茂町山城国分寺跡	104 8世紀	加茂町教育委員会
172	風招	1	"	104 "	京都府教育委員会
173	陶埴	1	峰山町扇谷遺跡	10 前2世紀	峰山町教育委員会
174	鹿角製ササラ	1	福知山市石本遺跡	22 6世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
175	木製琴	1	大宮町正垣遺跡	14 3世紀	"
176	華南三彩盤	1	京都市上京区下立売通新町西入 (府庁)	59 17世紀	"
177	鹿と樹を描いた円筒埴輪	1	加悦町作山1号墳	17 4世紀	加悦町教育委員会
178	軒丸瓦	1	宇治市隼上り瓦窯跡	80 7世紀	宇治市教育委員会
179	"	1	山城町高麗寺跡	96 7世紀	山城町教育委員会
180	"	1	木津町梅谷瓦窯跡	8世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
181	"	1	京都市左京区尊勝寺跡	55 12世紀	"
182	"	1	宇治市平等院	"	奈良国立博物館
183	緑釉陶器	1	京都市上京区猪熊通丸太町下ル (平安京冷然院)	9世紀	京都市考古資料館
184	"	1	京都市中京区西ノ京徳大寺町 (平安京右京三条三坊)	"	"
185	"	1	大山崎町山城国府跡	79 "	山城町教育委員会
186	志野向付	1	京都市上京区室町道榎木町下ル	17世紀	京都市考古資料館
187	黄瀬戸茶椀	1	京都市上京区下立売通千本東入	"	"
188	黄瀬戸向付	1	京都市上京区烏丸通上長者町上 ル(内膳町遺跡)	58 "	京都府教育委員会
189	京焼皿	1	京都市上京区烏丸通今出川上ル	18世紀	京都市
190	瓦器火舎	1	京都市左京区吉田近衛町遺跡	14世紀	京都府教育委員会
191	弥生土器裝飾器台	1	峰山町古殿遺跡	12 3世紀	京都府立丹後郷土資料館
192	弥生土器台付壺	1	亀岡市千代川遺跡	39 2世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
193~195	須恵器器台・壺・蓋	3	城陽市青山2号墳	90 6世紀	柏井光彦
196	須恵器特殊扁壺	1	丹後町高山12号墳	6 7世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
197	須恵器提瓶	1	精華町畑ノ前東4号墳	6世紀	精華町教育委員会
198	緑釉陶器四足壺	1	田辺町田辺遺跡	9世紀	田辺町教育委員会
199・200	緑釉陶器羽釜・火舎	2	大山崎町山城国府跡	79 "	大山崎町教育委員会
201	織部沓茶椀	1	京都市上京区烏丸通上長者町上 ル(内膳町遺跡)	58 17世紀	京都府教育委員会
202	弥生土器壺	1	丹後町竹野遺跡	4 前3世紀	京都府立丹後郷土資料館
203	弥生土器壺	1	亀岡市北金岐遺跡	40 3世紀	京都府埋蔵文化財 調査研究センター
204	土師器壺	1	舞鶴市志高遺跡	20 4世紀	"
205	須恵器壺	1	福知山市石本遺跡	22 6世紀	"
206	須恵器壺	1	亀岡市篠前山窯跡	42 8世紀	"
207	常滑焼壺	1	福知山市大内城跡	27 14世紀	"

番号	遺物名	点数	遺跡名	時代	所蔵・保管者
208	常滑焼大甕	1	京都市醍醐寺三寶院	15世紀	醍醐寺三寶院
209	丹波焼甕	1	京都市上京区烏丸通上長者町上ル(内膳町遺跡)	58 17世紀	京都府教育委員会
210~213	土師器コシキ・ナベ・カマド	3	福知山市石本遺跡	22 6世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
214	須恵器三足羽釜	1	長岡京市長岡京跡右京7次(西二坊大路)	8世紀	京都府教育委員会
215	土師器羽釜	1	木津町木津遺跡	15世紀	京都府教育委員会
216	灰釉陶器椀	1	京都市北区大將軍坂田町(平安京右京一条三坊九町)	56 9世紀	京都府教育委員会
217	黒色土器椀	1	京都市上京区烏丸通上長者町上ル(平安京左京内膳町)	58 "	"
218	漆器椀	1	"	58 17世紀	"
219	瓦器椀	1	京都市上京区烏丸通中立売上ル(平安京左京北辺三坊五町)	13世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
220	青磁椀	1	久美浜町日光寺遺跡	2 "	"
221	須恵器鉢	1	亀岡市篠芦原窯跡	42 9世紀	"
222	丹波焼播鉢	1	福知山市大内城跡	27 14世紀	"
223	信楽焼播鉢	1	京都市上京区烏丸通上長者町上ル(内膳町遺跡)	58 17世紀	京都府教育委員会
224	縄文土器深鉢	1	舞鶴市志高遺跡	20 縄文前期	京都府埋蔵文化財調査研究センター
225	弥生土器甕	1	丹後町竹野遺跡	4 前3世紀	京都府立丹後郷土資料館
226	"	1	福知山市石本遺跡	22 2世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
227	土師器甕	1	亀岡市北金岐遺跡	40 4世紀	"
228	"	1	福知山市石本遺跡	22 6世紀	"
229	"	1	京都市北区大將軍坂田町(平安京右京一条三坊九町)	56 9世紀	京都府教育委員会
230	瓦器鍋	1	京都市吉田近衛町遺跡	14世紀	"
231	土師器焙烙鍋	1	京都市上京区烏丸通上長者町上ル(内膳町遺跡)	58 17世紀	"
232	銅鉢	1	田辺町畑山3号墳	94 7世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
233	◎ "	1	久美浜町湯舟坂2号墳	1 "	久美浜町教育委員会
234~236	須恵器杯・蓋	3	木津町上津遺跡	8世紀	木津町教育委員会
237	緑釉陶器唾壺	6	向日市長岡宮跡164次	"	京都府埋蔵文化財調査研究センター
238	◎須恵器長頸瓶	1	久美浜町湯舟坂2号墳	1 7世紀	久美浜町教育委員会
239	回銅製経筒	1	福知山市大道寺経塚	28 13世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
240	土師製経筒	1	久美浜町山形古墓	"	"
241	埴輪家	1	城陽市丸塚古墳	88 5世紀	城陽市教育委員会
242~245	"	4	宇治市庵寺山古墳	81 4世紀	宇治市教育委員会
246	"	1	木津町上人ヶ平埴輪窯跡	100 6世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
247	"	1	綾部市野崎4号墳	33 "	"
248	"	1	木津町内田山A3号墳	98 5世紀	"
249	"	1	長岡京市塚本古墳	77 6世紀	"



## 凡 例

1. 本図録は、1990年8月8日～9月2日の京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展「京都・古代との出会い」の展示図録である。展覧会出陳遺物580点中253点をここに収録した。なお出陳目録は別に用意した。
2. 収録した写真のうち、京都府埋蔵文化財調査研究センターのものは、主に田中彰が撮影した。その他のものは、次の機関・個人の方々から提供をうけた（順不同、敬称略）。

綾部市教育委員会 宇治市教育委員会 大山崎町教育委員会 加茂町教育委員会  
加悦町教育委員会 京都国立博物館 京都府立総合資料館 京都府立丹後郷土資料館  
京都府立山城郷土資料館 京都市埋蔵文化財研究所 京都府立福知山高等学校  
京都市 京都市考古資料館 京都リサーチパーク株式会社 木津町教育委員会  
木下美術館 久美浜町教育委員会 京北町教育委員会 城陽市教育委員会  
精華町教育委員会 丹後町教育委員会 東京国立博物館 同志社大学考古学研究室  
奈良国立博物館 長岡京市教育委員会 長岡京市埋蔵文化財センター 向日市教育委員会  
向日市埋蔵文化財センター 山城町教育委員会 立命館大学考古学研究室 中央公論社 加茂町 梅原章一
3. 資料調査、図録作成、展示品借用にあたっては、上記の写真提供者のほか、次の機関・個人の方々から御指導、御協力をうけた（順不同、敬称略）。

網野町教育委員会 井手町教育委員会 岩滝町教育委員会 円頓寺 園部町教育委員会  
田辺町教育委員会 文化庁 福知山市教育委員会 弥栄町教育委員会 八幡市教育委員会  
峰山町教育委員会 向日市文化資料館

佐藤晃一 細川康晴 近沢豊明 永田信一 中村敦 峰巍 浪貝毅 玉村登志夫  
山中章 清水みき 山本輝雄 中島皆夫 崎山正人 杉本宏 近藤義行 鷹野一太郎  
村川俊明 波多野徹 和田晴吾 高橋美久二 柏井光彦 北義一 玉城玲子  
山田良三 中島正 松本秀人 森郁夫 井口喜晴 三浦到 榊井豊成 堀内佳子  
永野力 広瀬和雄 大曾根康博 千原洋一 林享 池田一郎
4. 掲載した遺跡の復原図は、伊賀高弘・石井清司・伊野近富・増田孝彦・平良泰久の原案にもとづき、早川和子が作製した。
5. 本図録の作成は、佐原眞理事の指導のもとに、石井清司(5・10)、磯野浩光(3・4)、奥村清一郎(1・7)、小池寛(2・6・12)、辻本和美(8)、平良泰久(9・11)が分担し、平良が総括した。

## 京都・古代との出会い

—京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展図録—

発行年月日 1990年8月8日

編集・発行 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
向日市寺戸町南垣内40-3

☎ 075-933-3877

印刷 有限会社 関西プロセス  
京都市右京区山ノ内山ノ下町13

☎ 075-312-3161

